

奇譚クラブ



N02

Kitan
Club

18.00

曙書房

變態奇人號

第 二 號



奇譚



クラブ



目 次

變態奇人 變り種 探訪 弓削 忍

エロ亡者漁色行狀記

殺生關白行狀記 師直行狀記 信田 春男

態者像 變性群

- 一、陰部窺視症患者(グキスムス)
- 二、被虐待性淫慾者(マゾヒスムス)
- 三、虐待性淫慾者(サディスムス)
- 四、崇物性淫慾者(フエチスムス)

南國情緒溢る、シンガポールの脇道………浮田 次雄

一糸まどわぬモデル打明け話………水 原 淳 子

生殖器崇拜と性的神土俗玩具の研究(二)左 海 山 人

原始人の變態を探索………矢 部 文 吉

習奇妖怪

性秘具カンピの巻 割禮 屍と同食する妖習

マンガ——或る日の好色社長………南 陽 二

珍商賣▲男女口入瓜貝屋………淺 川 曉

女態 彼女の實話………忍 頂 寺 穰

の生 女教員より轉落して 客種を妊娠した十四の娘

闇の バンバン宿に巣くう女

異國・變態風呂めぐり………青 木 富 兒

僕の男妾の告白………中 原 春 美

▼肉蒲團の行方………豊 艶 文 庫 主 人 ▲ヤミ女の貯蓄王………神 山 榮 三



変人奇種

変態

変り

探訪

南陽

忍

禪をつるして楽しむ女

Mとゆう町はづれ、郊外電車の窓より眺めることの出来るところに、もう餘程以前に建つたのであろうアパートが見えた。

はりばての壁が落ちた後に木の骨が露わにした姿を小さいゴミ／＼とした家並の中に混えていた。一歩足を踏み入れるともう玄關から雨溜りがしているとゆうアパートにも、お多分に洩れず引揚者や戦災者が割り込んで超満員をつづけている。六畳一間に六七人ごこ寝しているのも珍らしくなかった。

此のアパートに、何時頃から住んでいるのか一人で一室と言つても六畳ばかりだが、占領している女があつた。彼女は三つばかり先の驛の近くにある学校の教員をしているとの噂であつた。

然し同じアパートに住んでいる人達も別に言葉を交わすわけでもない。ので確かなところはわからなかった。

彼女は瘦せすぎた青白い顔に度のきつい眼鏡をかけて、見たところもう三十を越した老嬢タイプである。附近の人の話では彼女の風呂へ行く姿を未だ見かけたことがない、盛夏の日でも巾をびったり閉めて孤獨の生活を續けているとゆうことだ。僕が偶然昔の友達をそのアパート

に訪ねて此の話を聞いた。僕の持前の好奇心がムラムラと湧いた。

「此れは面白い」と思つた僕は次の様な彼女の生活實記を探りあてることが出来た。

彼女の名は村松泰子と言つた、今年三十二歳になるそうだが、勤め先はやはり学校の教員であつたが、しかしそんな事はどうでもよい面白いのはそれからである。

彼女村松泰子は自稱大變な潔癖家である、彼女が銭湯へ行かなかつたり共同炊事場へ行かないとゆうのも此所から發しているらしい。

度のきつい眼鏡の奥で目玉のふちがビク／＼痺れんしているのも神経質などところを表わしている。

雑沓や塵埃は極度に彼女の敬遠するものだ。だから爪の間に黒いものを溜めたり煙草のやにで歯を眞黒にしたりする男とゆうものも極端に嫌いらしい。

然し彼女とても木石ではいい。ま

して人並の健康に恵まれしかも中年を迎えた彼女の身體が承知しない。

部屋の扉を閉めきつて果して彼女は何にをしているだろうか。

西側に向いて開いた窓には何時もと言つていい位カーテンがかかつているし、扉には錠がかかつているので神秘的な彼女の私生活は、容易なことは覗うことが出来ない。

六疊の部屋のベツトを除いた外の場所には、櫛がいろいろしてつるしであるのだ。それも潔癖家の彼女がとアツと驚く古色蒼然たる男の櫛である。所々汚點さえあるとゆうやつを並べてある。過去幾年か彼女が苦心して蒐集し愛玩おかない代物なのである。

彼女が隨喜の涙を流して弄ぶ古櫛はどんな経路を辿つて彼女の手に入つたのであろうか、僕だけではなく他の人も知りたところであるが、とまれ彼女の古櫛に對する蒐集愛玩癖は狂的なものでさへあるのだ。

淡暗い部屋に閉ぢこもつた彼女は諸々の櫛を陳列して楽しむと共に、その中で最も汚れのひとつを取ると、その中に顔埋めて、細づりをして、その男の移り香に酔うのだそう。

次に僕は彼女が如何にして櫛を集めたかとうことを調べたいと願つてゐるが未だに果さないでゐる。

素足を舐める男

彼はまだ一度も結婚したことがないと言つてゐた。彼は今年四十幾歳

春へ移り、單衣ものから、足袋を脱いで素足を快く新緑の風に吹かせて

かになつてゐるのだ。

彼が未だに獨身でいる

とゆうこと

は、かれか

ら次に述べ

る世に類例

のない彼獨

特の或る奇

習が原因し

ていたとゆ

うこともい

えるであろ

う。

青年期を

迎えてから

の夏は、彼

の獨壇場で

あつた。そ

れだけ彼は

夏とゆう夏

をどんなに

待つたこと

だらう。憂

鬱な冬から



歩く頃になると、彼の異常な嗅覺は何物かを求めて街を彷徨するのであつた。

彼が憧憬おくあたわすこれ求めてゐるのは、若き女の素足である。

昔のようやう開かんとする十七八から三十五六の姥櫛までの女の素足はこよなく彼の神経をかき立たせるのであつた。

夏の夕方、スカートの裾から脛より下を出した薄衣の娘の通る街路を眞剣な眼をみはらして、俯むきながら見ているのは彼であつた。赤い鼻緒から出たふつくらと肉づきのよい白い素足、彼はじつと見つめてゐる眼はらん／＼と妖しいまでにかゞやき、口は舌なめづりさえてゐるのだ。彼は女の外の部分に對しては少しも興味を持たない。

ただその脂つこい鮮肌のネバ／＼した素足にだけ、喜びを感じ否、性的亢奮さえ起すのであつた。

自轉車を走らす少女の回轉する足にも彼の鋭い視線が投ぜられるのであつた。

彼は若い女の素足を眺めることによつて興奮し歡喜し慰安されてゐたこの彼一人のひそかな楽しみは誰にも發見されることなく數年間つづけられた。彼は美しい足の女に逢つたりすると野良犬のようにはろばいながら何處迄も、その女の跡をつい

て行つたり、盛り場の雑沓で砂ぼこりを浴びて、何時間も茫然としていることがあつた。

こうした熱心な漁色の眼によつてさらされた女の素足幾千、幾萬、一人一人の顔が違ふように、足の表情も又千差萬別であると彼が言うのだ。「目は口ほどに物を言う」がしかし足指の表情は、目以上に物を言う可憐なもの、横着、傲慢、輕薄なもの、愛嬌、知的なもの、其の他ありとあらゆるものが感じとられる。

此頃では、足を眺めただけでその女の容貌や性質、はては運命までも想像したりすることが出来るようになり、彼の楽し、空想の時間が、そんなことに費されるようになった。しかし彼の奇習は、只女の足を眺めて充奮しているだけではすまなくなつた。あの柔かいぼつてりした足に觸れてみたいと言う慾望が、強く彼の心をゆすぶるのだつた。

其の頃いつの間にやら彼は銭湯の下足番に傭われていた。此所では彼はふんだんに、湯上りの女の素足を一年中夏冬の區別なく眺めることが出来て、彼の最も楽しい仕事の一つであつたわけだが、始めこそは、櫻色にはんの上氣した湯上りの素足を眺めては満足していた彼ではあつたのだが、いつの頃よりかそれだけでは満足せず、下駄を揃えてお客さ

んが、履くときに鼻緒をなおすようにして、ソツと足に觸れてみる彼であつた。その觸れるか觸れない感じが、とても彼をうれしくさせるのであつた。始めの中は、却々親切なサビスのよい下足番だとうう評判であつたが、そんなことがだん／＼昂じて、時々若い女のお客の足の裏をくすぐつたり、拇指を握つたりする事が度重なつて、遂に下足番もやめさせられてしまつた。

だが一度足の感觸の愉悅を知つた彼は、今度は同じ町の郊外にある料理屋の内風呂の三助兼雑用として傭われて行つた。

此所では、前に懲りていたので神妙に仕事をし、鏡の様に磨いた廊下を歩く女中や仲居の素足を眺めるだけで辛棒していた。こうゆう所にいる女達の素足は、どことなく色ツばい所があつて彼の好みに大變あうのであつた。彼の一生の願ひは、この女達の白い足を思ふまま玩弄したいとゆうことであつた。

庭の掃除なんかしながら時々ぼろとしてゐることのあるのは、常に彼の頭にこの事があつたからである。此の料理屋へ移つて半年ほどした或る日の午後、丁度來あわした藝者がひまのあるまゝ彼に按摩してくれと頼んだ。

素朴で内氣でむしろ愚鈍にさへ見

える中年過ぎの彼に對して、三助とゆう仕事から、むしろ輕侮の意味をこめて頼まれた事であつたが、彼のその按摩のしやうの丁寧さは、驚くばかりであつた。

特に足部に至つては、足指の一本一本に至るまでもソソバイ位揉みほぐして呉れるのであつた。初めて若い女の足を思ふまゝ握ることの出来た彼は興奮は絶頂に達していた。

このことがあつてから、時々彼に按摩を頼む藝者や仲居があつた。その度に彼の手には臨時の収入が握られるのであつた。

そんなことがあつてから、彼は仲居や女中に無料で按摩をしてやるかわりに、女達の素足を舐めさせて貰つてゐるとゆう噂があつた。彼の話では仕事をした後の汗ばんだ肌を舐めるのが一番好きだそうだった。

鹽ツばいや、脂肪の浮かんた素足を舐めると、とても旨くただ夢中で指の間から指の先にかけて、チャブ／＼と舐めまわす變態怪奇な彼の姿が、サヤツ／＼といつて騒ぐ女達に混つて見受けられた。

冬でも足袋も履かずに濡雑巾で足をふいてきれいにしておくのが、イキだと言われた藝者衆の一人に、足の裏を舐めさせて喜ぶ女があるとかで、今では専ら變態的な彼のためにその白い素足をかしてやつてゐるとゆうことである。――

變態性慾者群像

(一)

陰部病視症患者

昭和×年春、群馬縣A町のA劇場の便所内で、婦人の用便中に何者かが、その臀部または陰部附近を撫でることが流行した。

被害者は最初のうちは、一週間に一人、若しくは五日目に一人ぐらゐであつたが、後には一夜に二三人も襲われたことがあり、それが半年ばかりも續いたので、A劇場の便所には、女の尻を喰う怪物がいるとゆう評判がつたわり、次第に入場者も減つて来るようになった。

そこで營業主も大變と、毎夜番人を便所の附近に見張りさせて、嚴重に監視したが犯人は神出鬼没で、どうしても捕らない。ところがその年の秋になつて、或る夜番人が例の如く巡回していると、便所の汲取口に延を敷いて、半ば潜り込まんとしてゐる者があるのを發見して、早速引摺り出してその正體をつきとめた。此の者は附近の不良少年で、嘗て窃盜罪で訓戒處分を受けたことのある要觀察中の者で、便所の汲取口から侵入するのを特技とするものであつた。彼は捕えられた隙をねらつて一旦逃げたが、其の翌日鐵道自殺を遂げた。

エロ亡者

信田春男

漁色行狀記

南陽二畫

殺生關白行狀記

或る日、秀次卿、女房衆の一人をひそかに召して申された。

「今日は侍女一同にきつと申しつけることがある。構えて背くまいぞ、いち／＼に身がゆうなりにせい、さなくばきつと重い科に申しつけようぞ、心得たか」

日頃のこともあり、近頃は無惨な石攻めのお仕置もあつたれば、何やら仔細は解しかねたが、ただ怖れいつて

「何んと御意にたがひましょうぞ」と言え

「先づ侍女残らず一度に湯に入つて身を清めい。替りおうてせいで、一度に湯舟に入るのちや。よいか。事餘の事は追つて申しつけよう。」

近頃また不思議な御意かなと怪しんだが、きつい御達しであるので、ひたすら畏まつて、旨を外的女房衆に傳えて、十人程ながら一同湯殿に揃つて入つた。

今日は何の御用ぞ、今宵何か格段の御酒宴でもあるかと、互に怪し

囁きながらも、思ひ／＼に、肌を磨いていた最中へ、俄かに湯殿の戸が開いて裸形の關白秀次卿がつかつかと参られた。

「あ、殿様が」

皆慌てふためいて、湯舟にあつた者はとび出し、脚を伸べていた者は引き込んで一同に身をすくめて平伏した。

「は、は、は。慌ていでよい、今日は其の方共が素肌の見分に参つた、湯の香に混つて脂粉の香は、また格別ぢやなあ、先づ一浴びしよう。」

と湯舟に入られたが

「さて其方等は石ぢやなし」

石と聞いて皆、ギョツとして顔をあげた。秀次卿は笑つた。

「石を聞いて驚いたの、いや石で作つた辨天さまぢやとゆうことぢや

そう固うなつた所がな——

先づくつるげい。今日は主従の隔てを棄てよう。ただ男女の別があるばかりぢや」

やがて湯舟を出ると、流し場の櫓

の床に、なが／＼と五體を伸ばして仰向けに身を横えられた。

「なんと奥務めの身には、男の裸形は珍しかろう。さあ、近う寄れ」

女房衆は顔を見合わせたが、やがて一人がくす／＼と笑うと、吊られて皆が恥かしげに口を押えて笑い出した。

「石辨天が笑うたな。皆近う寄つて總がかりで此の身を洗うのぢや。五體の一つに二人づつ掛ければ、併せて十人ぢや。さあ早よう。笑うてばかりいまいぞ」

裸形になつて人間自然の姿に歸ると、自ら上下貴賤の差別が消えるものか、それに又衆を頼んで氣強うなつてか、既に女房衆の眼には、日頃の怖い殿様の姿はなくて、若く美しい一人の男の肉體が横わつてゐるのを見るばかりであつた。

「殿様、美はお手を」

と一人が寄ると、一同が我れもわれもと寄つて来て五體にとりついた秀次卿はよい心持ちで一人の白い滑らかな膝を枕にして、手足を皆のなすまゝに委かせながら、一同の素肌の品定めを始めた。

「先づこゝ見た所。一應は皆ビルゼンぢやな。ビルゼンとゆうことは解

すまい。ビルゼンとは南蠻の言葉で生娘の事ぢや。は、は、は。中にはビルゼンでないものもあるかな。」

「そちは色は白いが、肉が細いな。まちつと肥えたがよいぞ。」

「そちは艶がよくつて、脂性だな。觸れると滑るようぢや。」

「殿様は何性ぢやな？」

皆が笑うた。

「癖性ぢや」

「お、怖や」

また一しきり笑いさざめいて、湯殿は時ならぬ花が咲いた。

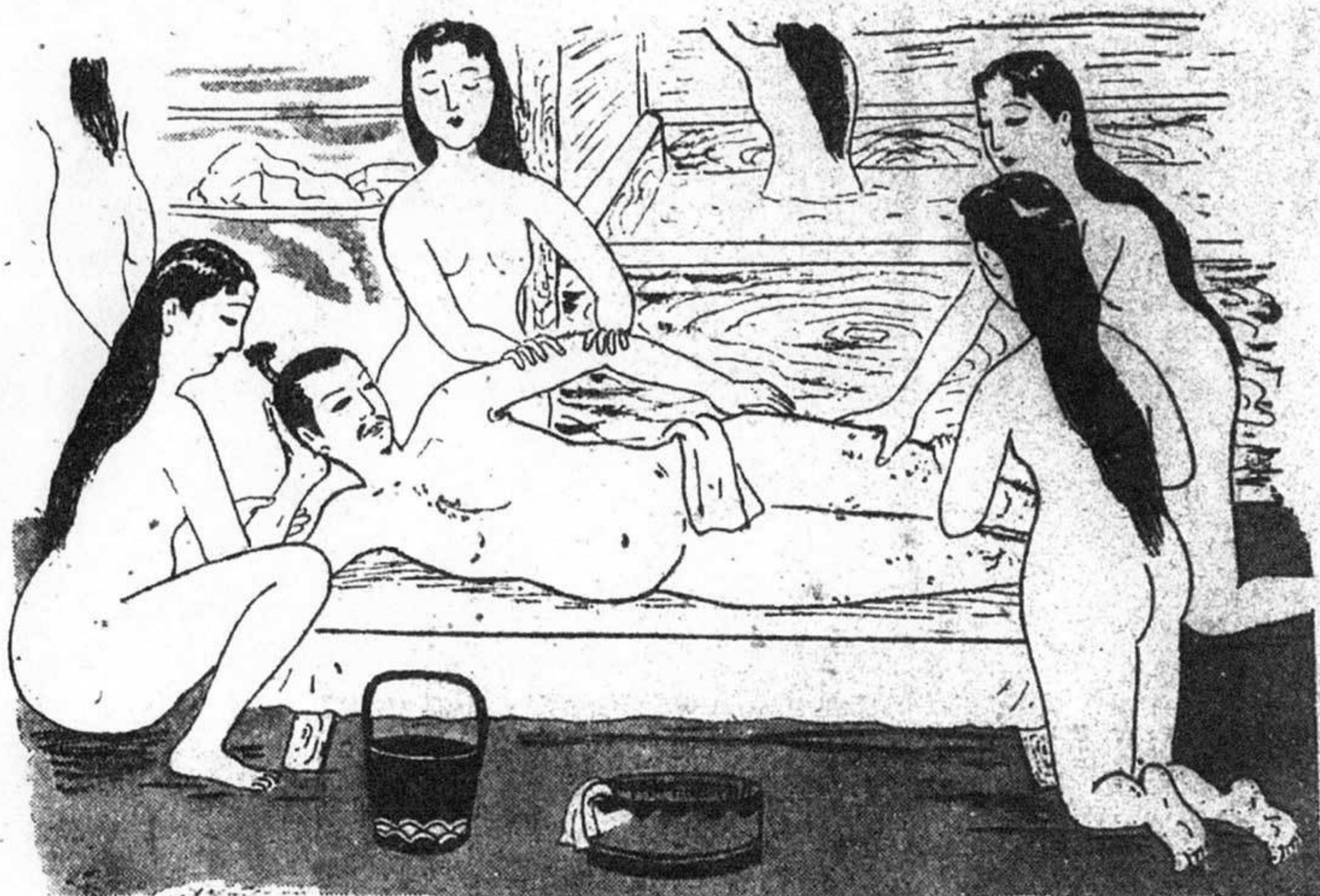
「や、そちの肌はまた格別ぢやな。白うて、澤があつて、目が細うて、肉がはちきれはうぢや。どれ、乳を見せい。いかさま正眞ビルゼンぢやな。乳房が小そうて、乳首が鳩の足のよう紅い。疲れ物のお末御前などは及ばぬな。」

「勿體ない。御台様に言いますぞ」

「殿様はお辰様ばかりお褒めぢや」

「なに、お辰？、いかさま其方の名はお辰ぢやつたな。」

こうして、此の中から眉目も五體も揃つて美しい三四人の女房が夜のお伽に選ばれて、わけても乳首が鳩の足のよう紅いお辰の方が、一番の御寵愛を受けたのであつた。



師直行狀記

高師直とゆう貧慾な好色漢の名前は有名であるが、これは實在の人物をそのまゝ舞台にのせることを憚つた江戸時代の習慣から、北朝の武將高師直の名を借りて、高家吉良上野介を描いたものであつた。

この事は、師直にとつてはかなり迷惑なことで、今ならさしづめ流行のモデル問題として、忠臣蔵の作者竹田出雲を相手取り、名譽毀損の訴訟でも起すことになるであらう。

しかし上野介を師直に摸したこと、は、二人共相譲らぬエロの猛者である點に、作者の史眼と茶氣がうかがわれて、微笑を禁じえないものがある。

それ程に師直にもまた書かれても辯解の出来ない弱味があつたのだ。

塵塚物語に

「高武藏守師直が淫慾熾盛なることおさおさ書きしるし世に傳えたれど、この外不義はかり難しと見えたり。ちか頃ある武士、年久しく所持して侍な、おかしき草子なりとて見せ侍べり、その中には、師直が一生の淫事のしなをあげて、同じくその女を記しとどめたり。始終見侍るに世にいえるは、十のもの、二三ばかりなるべし。當代いさゝか遠慮の人もあれば、その姓名をしるし、そのしなをあらわしかたきことも侍る」とあつて、この物語の書かれた天

文二十一年の頃にもまだ「當代いさゝか遠慮の人々」もあつた程に彼の毒牙は遠くまで及んでゐた。

塵塚物語の作者をして「就中にくさふるまいなりとおぼゆ」と憤慨させた師直行狀記の一つである。

月並の漁色に倦意をおぼえて、より尖端的な刺戟を望んでいた師直は或る時、側近の老女をひそかに派遣して數多い家臣の家庭を、内密にさぐらせた。

この特別の秘命を帯びた老女達は百方苦心の末、數十日にして漸く、各家臣閨室の美人名簿を作製し、師直に復命した。

好色爺師直の喜びはゆうまでもない。二三日の後、執事師直の御奥より特に誰々の内室に御用のことありと、かの名簿に録された家臣のもとへ老女を以て申し遣わしたのである。沙汰を承つた家臣達は、何事の仰せかと、内室を盛裝させて、とるものもとりのあえす伺候させた。

師直の館は、百花の春が、ひとゝきに來て、時ならぬ花が嬉を競つて咲き亂れた。稍あつて奥より

「唯今大ぜいにてお目見えあることしかるべからず。上にも一人づつ召し出せと御院ある間、いづれのお方にてもまづ一人まいらせたまえ」と申し出でて、かの女房を一人づつ奥の座敷へ通し

南國情緒溢る、

シンガポールの脇道

浮田次雄



ローズの美女

バラの花がある常夏の國シンガポールは終日微風が快く素肌をなでる赤や黄の原色の建物、濃緑の熱帯樹の中に浮かんでくる。

海を眺めることの出来るバルコニーに涼んでいると、いつしか傍のベンチに隣り合った美女がしのびやかに腰かけている。

肌も露わな浮いドレス。情慾的な濃いルーージュ。チラリと盗み見した瞬間、彼女のウインクが怪しくも胸をついた。

「ハロー、マイ、デイアー」
そう呼びかけながら女は近づいて来た。そして自分のドレスに附けて

いた造花の赤いバラを、背廣の胸に差してくれた。

「ねえ、御退屈ぢやないこと？私お慰めしたいワ。お暇でしたらフィンデンソン・グリーンでお遊ばしませうよ」

それから二人乗りの力車に揺られて、宵風さわやかな海岸通りを走りフィンデンソンの海べりに出た。

椰子茂る渚。そよ／＼と吹く海風に吹かれて、燃ゆる火焰木の夢は、圓らかに結ばれた。

続のような柔らかな肌が忘れることの出来ないものであつた。それから二人の間でどんな取引が行われたか、それはもはや想像するまでもないことだ。

ところでその翌日。
ラファイル・ホテルと云えば、シンガポールで第一流のホテルだ。凡そ富裕な旅行をする者なら、ごこの人種でも、大抵はこゝで泊る。

そのラファイル・ホテルのモーニング・ルームで昨日の女にばつたり出逢つた。併し今日は彼女は一人でなかつた。友達らしい三人のすらりとした男を左右に従えていた。突差に妙な亢奮を胸にもやしたが、女

は落着いた調子で「デイアー、こちらへいらつしやいよ」

「これは私のハートなのよ、ゼントルメン、どうぞこのローズを一本づゝお取り下さい」

女は、赤、白、黒、黄の四通りの造花のバラを出して、四人の男に一本づつ抽かせた。それから自分のドレスの襟を返した。そこには白いバラが差してあつた。すると彼女は、白いバラを抽きあてた中年の紳士の腕をとつて

「今宵の幸福者は貴下よ。ねえ。フィンデンソン・グリーンでゆつくりお遊び致しましょう」

と云いながら、彼と手を組んでホテルから出て行つた。これで今日のカモもまた二三十ドルの金貨を失うだろう。

ドリアンの味

公娼街のないシンガポールでは、専らアウト・ドアの女が跳梁している。彼女達は、貴婦人の様な装をこらして力車に乗つて街を走りながら客を拾うのである。

公娼に差かゝつた時のこと、そこ

「師直、奥と口との間に一間をかこいかくれいて、かの女房らの足おとを聞くと、ひとしく立ちいで、とらえかえし」尾籠をつくして理不盡のふるまいなれば、女房とも是非なく心ならずして師直の所存にしたがいにけり」

とゆうことで、武將としての師直よりもエロの闘將としての師直のこの戦術は、塵塚物語の作者をして、「そのときのさまこそものくるほしくことようにも侍るべしと、かたはらいたくおぼ侍る」と重ねて憤慨せしめてゐる。

の菩提樹の蔭に憩う力車の上から「ハロウ」と呼び止めた女があつたオランダとボルネオの混血兒らしい。何んとなくネイデイズめいた容貌ではあるけれども併しこの種の混血女は、最も情熱的な女として、暗黒街ではもてはやされるものだ。

淡い光りにチラリと隙見した小麦色に張りきつた太股、濡れたような眞紅な唇、遊蕩兒ならすとも、赤道直下の太陽にたゞれた心が肉が妖しく躍らされるのだ。

いつたい三四十種もの異種属が雜居しているシンガポールは國際的である點に於てとも上海の比ではない。こゝでは四十二種にも及ぶ各國人語が日常使用されている。

人種のコンクール、これがシンガポールだ。だからグークサイドにしても複雑を極めていて、上海のモ

一糸まとわぬ

水原淳子

モデル——打明け話

太した教養もいらないし身體さえ均整がとれていれば、文字通り裸一貫で、つつ立つていけばおマンマが載けると言う結構なお商賣だ。苟生活の現今、最ものお仕事、苟生に言われますが、しかし此の一糸まとわぬモデル商賣にも、それ相應の悩みがあるものよ。

モデル女と言つても、必ず素裸になるものとは限りは限らない。コスチュームといつて、着物をつけたままでポーズを取るものもありますが、然しモデルと言えば、一般に裸になるものと思われているし、又備わった以上特別の場合を除いては、畫家や彫刻家の注文に應じて、勿論裸にもなるしあちゆる姿態もとらねばならない。

私達モデルになる女は、十四五才位より二十四五才位迄、斷髪、短髪洋風、和風、お好みに応じていろいろあります。

畫家によつては、絶対に處女性を要求する堅人と、餘り年若い處女よりも圓熟の極にある色氣たつぷりの肉體を選ぶ通人がある。

身に寸錢も帯びないで全裸體となつて男とゆう動物の前で、御意のまゝに、両手をひろげたり、足を曲げたり、個から見れば、度胸のいい女

だとか、すれつからしだとか思ふ人があるそうですが

妾は十七の時から家庭の事情でモデルになつていますが、始めは、モデルなんてイヤなこつたよ。女の三助さんちやあるまいし誰がハダカになんかなつてやるきんかつて、言つて嫌がつたけれども、だれど慣れてくれば、今では平氣だわ

そりや商賣が商賣だから、いろんな誘惑はありますけれど、やはり畫家や彫刻家は、めつたに間違ひなんかないことよ。もし悪いことをするとラチオみたいになく仲間になつてしまふから。

其の點専門の藝術家はいいけれども、アマチュアやインキ畫家になると、お金にはなるけれども、はじめから用心が必要よ、まづ虎の尾を踏むつもりでゆかなくちや。

此の間もあたいに直接注文してきた紳士があるのヨ、大阪の人なんだけれども、大阪にやいゝモデルが居ないから、あなたを見込んで直接上京してきたんだつてゆくのヨ。

「アトリユはどうするんです」

「いや、友人のアトリユを借りうと思ふんだが、それでは事が太層になる。ナニ、一寸の間でいいからホテ



△

ウチユンスの驚嘆などよりも、こゝにはもつと含蓄のあるものがある。

新世界にはキヤバレエがありカフエーがありホールがあつて、何れも間の女が出演しているけれども、併し一番度膽を抜かれるのは、グロテスク極まりない教授所だ。

「奥さんを（ ）なさる方法として、御家庭圓滿の秘術を御教授致します」

こゝの先生である怪やしげなる女は、客を相手に演説しながらいちいち説明するのである。

新世界に足を入ると、また至るところドリヤンの匂いをブン／＼させている男に出會う。いや只に新世界ばかりではない。マライの味はドリヤンから言つて、マライに來てドリヤンの味を知らない者はもぐりである、と言われドリヤンの出盛る時季になると、妻を質に置いてまで喰うと言われる位、マライの住民達はドリヤンを喰ひ喰つてゐる。

あの甘い濃厚な味は一度病みつきになると忘れられなくなる。そして果汁は非常な強壯劑になる。

このドリヤンを吸つて唇に匂いをたゞよわせている程の者なら新世界のダンテイだ。

—阿片窟—

ヘイ・ストリートの南京街を真直ぐに行くと、露地のあちこちに阿片窟が散在している。鑑札のない阿片窟は始終手入されているが、公認の

ところでは大つびらだ。

華僑やバ、南京たちは毎日こゝに集つて來て阿片に酔ひ賭博に耽る。だからシンガポールの暗黒面を見究めようとするれば、どうしても南京街を覗かねばならない。

阿片窟は旅館のようにつも部屋が小さく仕切つてあつた。玄關を入つて薄暗い廊下を渡つてゆくと、もう嘔吐を催したくなる嫌な臭が鼻をつく。それは丁度魚の腐つた臭と鉛の熔ける臭の混合したものだ。

それを我慢してボーイに案内された部屋に入ると、真中に中國風の木製の幅の廣いベットが置いてあつた。阿片もきせるも貸してくる。ボーイが出て行つた後で、建てつけの悪い壁のすき間から隣室を覗いたら、この室にあるのと同じベットの上で山羊蹄の瘦せた男と若い女とが、一本の長い煙管をくわえて寝そべつていた。阿片はこうして吸うものだらう。

部屋の壁に等身大の美人畫が描いてあるが、その壁にも阿片の悪臭がしみ込んでゐる。胸がむかつき頭が痛くなつた。奥の方では十萬ドル二十萬ドルの金を賭けるとゆう大賭博が聞かれています。しきりに牌の音が響いている。それも覗いて見たいとは思つたが、目まいがしうでとてもカタギの人間には長居は出来なかつた。



ルに来てくれたまえ。簡単にデッサンとるばかりだ」

「へエ、わざとデッサンをとり汽車に乗つていらしたんですか？御熱心なものネ」

「この道ばかりはやつぱり東京が本場だ」

とどうき話が變だと思つたけれども、とに角その紳士と一緒に連れ立つて行つたのサ。

ホテルとゆうその紳士のルームに案内されると

「さあ仕事は早い方がえ、脱いだく」

何んだかカバンから書用紙と鉛筆をとり出したようだから、まんざらインチキではないと思つて、洋服を脱ぐと、うしろでビチーンと鍵の音が

「こうしておかんとボーイの奴。気がきかんからナ」

なんかと捨ゼリフを言いながら、しかつめらしく鉛筆を持つていたが直ぐ捨て、しまつて

「あついで、一寸わしも失禮する」つて自分も洋服を脱ごうつてするぢやないの。

「駄目よツ、眞面目にあたいを描かないのならもう歸るワヨツ」

「イヤ君。ゴ、誤解しちや困るよ。わしもナ昔は紅顔の美少年で友人のモデルになつたこともあるし、この道には理解がある。わしが一つ模範を示そうと思ふのや。君はどうも固うなつていけん」

「どこの世界に畫描きが眞ツ裸にな

る國があるもんかもう知らないツ」と、素早く脱ぎすてたドレスを取ろうとする

「キ、君イそれではあんまり……」などと未練なことをゆうので、さすがのあたしもムツとして

ビシヤリ！

と思いきり紳士の横びんたを殴ぐりつけたの。こんな場合機先を制しなくちや駄目ヨ。

次に仲間に「メソ子」つてゆう氣の弱い子がいるの。始めて稼ぎに出た日、メソ子と飛んで歸つてきて

「ひどいわ、随分だわ」と泣いている。どうしたのつて聞くと

「だつて、だつて、あんまりなんですもの。あの先生、わたしに……もうイヤ」

「あの先生が何か無理なことでもい

つたのかい泣いちやわからない、云つておしまい」

「あの先生、わたしに着物脱げつて

ゆうの、脱いだら變な顔をして、みんな脱げつてゆうのヨ、わたし、お母さんの前でも、それア困りますつて、どうしてもそれ以上は脱がなかつたら先生怒り出して怪しからん、このごろはヘンなものばかりよこして怪しからんツて、ブリ／＼してんのヨ」

あまりにも純眞無垢な彼女は、モデルとゆうものは、ホーゼも何もかも脱いで一糸まとわす突立つていなくちやならないといつて、聞かされた時、世にも情けなさそうな顔を

て、また一しきり泣いたけど、今は優秀なモデルだわ。

又「腰袋の好子」とゆう子がいるワ。顔もそんなにシヤンぢやないし身體も特にい／＼つてゆう程ぢやないけれど、皮膚の美しいことツたら、あんな人ほかに居ないワ。越後の生れで、生れつきキメの細かくつて、白いんだけれど、更に其の上人工的に手間がかかつているのヨ。

先づお晝の暇な時間に銭湯に入つて、正味一時間、全身まんべんなく腰袋が破れてしまふ程マツサージをやるの。仕上げたところを見ると、まるで血の通つた大理石のようで、女ながらも惚々として、自分の皮膚の艶のナサが嫌になつてくるくらいヨ。だからあの子、トモ賣れるんだワ。

裸體美の構成

潔れを知らぬ無垢の處女が一糸まとわぬ放膽な裸體躍動する豐滿な肉體美！

純白雪の如き生きた塑像神韻漂渺として見る者をして恍惚たらしむ藝術的名品

清き五つの赤裸の姿を暖かき心もて享られたし

裸體寫眞——ハガキ版——モデル……

十八才の花はづかしき處女

五枚一組 荷造送共六拾圓 申込所 曙書房 代理部

變態性慾者群像

(二)

マゾヒスムス 被虐待性患者

静岡縣のS町に、生來的な變態性の田澤某とゆうのがあつた。

彼は十四五歳の頃より友達に身體を縛られると、何とも言えぬ快感を覺えたので、常に友人達に金錢を與えては、物置小屋などの薄暗いところで、嚴重に縛られ、手荒い處置をうけて喜んでいた。

その頃彼が最も好んでなした遊戯は所謂泥棒ごつこで、彼はいつも自ら望んで泥棒を志願し、多勢の友人から虐待されるのを無上の快樂とした。十七歳の時に力士を志望して東京に出て弟子となつたが、縛られ角士と呼ばれて有名となり、朋輩と遊廓に遊んでも常に女から縛られて楽しんでいた。特に相手が男子では興味がなく、また女でも弱々しい美人では感興が足りない。筋骨の逞ましい而も容貌の美ならざる鬼婆式の女によつて、極めて手荒に縛られたり打擲されたりするのが、一番愉快であつて、その間は宛然月世界に遊ぶが如く、恍惚として言い知れぬ快感に打たれる。色情は一度び興奮すると一週間乃至三週間繼續するやうである。彼の體格は偉大で且つ頑健。

但し身體の諸處に虐待による痕が澤山あつて中には生々しく化膿している部分もあつたやうである。

生殖器崇拜と性的神

土俗玩具の研究 (二)

左海山人

浅草の年の市に於ても、四五寸大の張子のものを薄桃色に塗つて、僅かに金箔を三四片つけたものを、櫻紙に類した柔かい紙に包んで賣つていたものであつたが、

此等は花柳界、飲食店等にて商賣繁昌の守り神として崇拝せられていたものであつた。今日も尚、これがあるか否かは知らないが、切かに賣つていふと言つた人もあつた。

總てのリングの中に於て、元より人工のものもあれば、又天然のものもあるが、最も顯著なものとしては日向岩瀬川の陰陽石であろう。

これは小林町の北一里のところにあつて瀨川の河畔に突元として立つてゐる見事なる陽石である。

更にこの瀨の斜面には陰石がある。これは天然ながら何れも眞に迫るとゆう話である。

私はこれを見るの機会を有せぬが一方は岩隙を控え、その上に「皇産靈幸魂神」なるものを祀つてゐるとゆう。

これも又すべて生殖に關係ある事柄一切の効驗あることは、他と異つていないのであるとゆう。

更に又露骨なものに、尾張國田敷神社の祭禮がある。これは尾張にある田畑の神との謂である。

平素は人知れず下の病に苦しむ人或は子を授けて貰うべし祈願する婦人等の多いことは、各地の性的神と全く同一である。

そして此の神社に於て驚くべきことには毎年この祭禮に、その列の先頭に立てる大轎に大きな陽物を描いてゐることである。

これを描き廻るとゆう面白ものである。この轎は丈七尺、幅三尺の白木綿は上部は注連縄及び幣紙五葉を書き、その右下に朱色にて奉棒とあり、その下に美事に雄大な赤色のリングを描いて、大膽にも總ての附屬物まで書き加えられてゐるのである。

その驚くべき露骨なるものを先頭に押し立て、次に神官、御奥とゆう順序に、いとも崇嚴にこの行列が練り歩くのである。

この當日の御神體は、木製丹塗の二尺三寸、周圍三尺とゆう大きなリングであり、且つ其の上には薬人形を跨らせるのである。

この變つた風景は他に一寸見ることの出来ぬ奇觀である。

平素に於ても、紙製の小轎が作多く奉納されるが、中には白木綿にリングが黒々と書かれてゐるものも決して少なくない。

社前には、木地及び丹塗のリングが數百本奉納されてあつたとゆうことであるが、これ等は今は全部焼却してしまつたとゆうことである。

これは日本に於ても、最も露骨なものとして顯著なものであるが、祭神には、玉姫命を祀つてあるとゆうことである。

日本にては他國と全く異つて性神には多くリングを以て代表さしてゐる。一個のリングが陰陽二神を代表せしめてゐる。

これは女性はその形狀等に於て崇嚴化することが困難なる理由によるものであるが、勢い奉納物に於ても多くは、リングがこれを代表してゐる様である。然し全くリングがこれを代表してゐるとゆうことは出来ない。

足利の水使神社の上田在の男名祠等に於ては多種多様な女陰の繪馬

變態性慾者群像

(三)

虐待性淫慾者

岡山市在住の四十七才になる僧侶田口は、中井テル子(廿五才)並に濱田イト(二十四才)の兩女と内縁

關係を結び三人にて同棲中、

テル子が非常に豐滿な肉體の持主であるところから、常に此れを裸體として眺めて喜んでゐたが、終いには此れを眺めてゐるだけでは満足せず、自宅の二階の佛壇の間で裸體にしたテル子の臀部や背部を大きな鞭でびし／＼と毆打し、傍にイトを置いて此れにも眺めさせ、テル子が痛みに堪えかねて、悲鳴を上げて逃げ廻るのを追いかけて、暴力を振つて罵し、また毆打しては罵し、殆んど毎日、同様の虐待が連續するので近所界隈の評判となり、彼は遂に檢舉されて傷害罪で罰金に處せられた。

テル子の臀部や背部は鞭の痕で、浮彫したように腫れ上つてゐた。その傷痕は見る者をして寒氣を催さしむるものであつたが、然るに彼女は警察で取調べられる際、それは虐待を受けた田口に對して、別に不平らしい一言も言わなかつたと言ふことであるから、彼女も又虐待淫慾者の一人であつたかも知れないと思はれる。

を奉納し然も極彩色で表わしているなどは實に珍らしいものとされている。

越後國刈羽郡岩山の中腹に辨天堂がある。この天女堂の前の浪打際に男根石がある。これが有名な羅石大明神である。

これを土俗では裸石といつて三四尺の鉛色の天然石である。

遠近の石女はこれに祈り子を求めるとゆうことである。

「陰陽神石圖」には「海濱にあり、子なき婦人……中略……この石に附くれば子を孕むとゆう。」と書いてある。

丁度これに似たのが越中大巖山の日石寺にもある。これは誕生石といつて子のない婦人がこれに祈り必ず妊娠するとゆう石である。

かつて前田家の姫もこの石を懐いて始めて妊娠したとゆうこと等も傳説となつてゐる。

前の辨天堂に男根石などのあるのは、面白い對照ではないか、辨財天が性神として顯著なものであることはゆうまでもないことである。

東京の千駄ヶ谷の榎坂に、おまんえのきのゆうのがあつた。

五百年を経ていると言われ相當の崇拜者があつたようで、婦人病は何んでも効くとゆう迷信で、次の様な著名な傳説がある。

昔、四谷に住むある大工が仕事から歸る途中。ふとこの榎の木の下

で休んだのであるが、その木の窟洞が女のものに似ているとゆうところから、もつと格好をよくしてやらうとゆう惡戯心から、持ち合わせていた鑿を出して削りなどして、家へ歸つて見ると、自分の妻が下腹部が痛い、ウンウンと呻つて苦しんでいる。

そしてその時刻を聞いて見ると、自分が惡戯をしていた時刻と全く同じであつたので、大工は非常に仰天し榎の下まで駆けつけて、熱心に榎にお詫びしたら、女は翌日から平癒してしまつた。

そこで大工は烏居や祠まで自分で造つて榎神社として祀つたのが、花柳界から崇拜されるに至つたものであるとゆう。

他に又この窟洞へ鉛を奉納する風習があるが、鉛が自然に溶け流れて實に露わなもので、これは信仰とゆうよりも、何人かの惡戯と見る方が當つてゐるであらう。

上野不忍池の辨天の裏の聖天島にも著名な石像がある。

前面から見れば行者に近い容姿をしてゐるが、背面からこれを見るときは紛れもない男根石である。

此の聖地蔵と相對的には、辨天堂の北に位する延命地蔵とゆうのがあつた。この延命地蔵は經文を刻んだ台石の上に舟形の石を重ね、その中央に地蔵を安置してゐる。

舟形は女性のそれを表示したもの

で、要するに兩性の結合を意味しているものである。

聖天さんが男女二體を祀つてゐることは、何人も知つてゐるところであるが、その聖天さんの表示として大根と巾着とを以てしてゐる。

この大根と巾着とゆうことは、餘程意味深い表示の仕方と見ることが出来るではないか。

其の他にも、私の手元にある性的迷信の記録は全國的に見て、無數といつてよい位あるが、多くは大同小異なので、この邊で止めて、この生殖器崇拜に關連して生じた陰毛に對する迷信を見てみよう。

その一端として「四神地名録」には陰毛を以て神體となしたる歴史のあることを記載してゐるが、その他横生逆産を安産せしむるためには、夫の陰毛十四本を焼いてこれを吞むべしとか、或は蛇に咬まれた時は男子の陰毛二十本を含み汁をのめば毒の腹に入ることもなしとか、或は又理髮店の切髮に婦人の陰毛三本を混じて煎じて飲めば、淋病の重症をも治すことが出来る等と種々なることが古文書にも記載されてゐる。

我が國の各地には、往々七難の陰毛とゆうものがあるとされてゐるがこれは七難除けとゆう意味で、特に長いのを尊むさうである。

この陰毛に對する信仰は今日も尙地方には存してゐる。殊に佛教に對する迷信の多い越後

地方では、本願寺法主巡錫の折などには、その浴水の水を乞ひ飲む。この中に陰毛の存することがあれば、特別に尊むことがあつたとゆう。此の種の事を挙げれば際限がないが、文明人に迷信の多いとゆうことは恥すべきであり、斯かる無稽の迷信は、速かに打破したいものである。次に土俗玩具、郷土玩具の中で、生殖器崇拜に基づくものの例を挙げてみたい。

(以下次號)

月刊 内職研究

文藝・副業・廣告・綜合雜誌

新商業副業内職新職業金儲實際新發賣商品仕入案内問屋製造家案内經營相談等實際的有益記事。仕事の余暇に何か良い内職はないかと求めてゐる方はぜひ御一讀下さい。小資本開業法通信販賣のコツ化學製品製法家庭工業其の他有益記事満載。會費壹年二百四十圓、半年百二十圓見本誌二十圓送れ金送す。

廣島縣尾道市西山城戸

内職研究會

玉手箱

若い男女へのプレゼント
興味ある書物文獻
寫真拾圓にて急送す。新刊圖書雜誌
目錄送金三圓要。

○岩手縣花巻市下 郵燈書房

原始人の變態生活を探る

矢部文吉



性的秘具(KAREN)

赤道直下の熱地には、日本内地の様な長い黄昏時とゆうものがない。今迄歸々と頭上にて照りつけていたかと思うと、突如として太陽は樹林の彼方に没入して、闇黒の帳が下されるのである。

それは一年中多少の遅延はありながら大體午後八時頃を境として起る私は夕食後日没時迄の時間を利用して、いつもの様に散歩に出た。

高温と多湿、植物は生長の好條件に恵まれて、鬱蒼たる熱帯樹林を形成している。此の緑の香にむせるジャングルの中を、分け入つて行つた。枯れ倒れた樹は、腐り果て、又その上に落葉が重り厚く腐葉土が層をなして密林の下を覆うている。

歩き行く私の腕や顔に執拗にブトや蚊が襲つてくる。ジメ／＼とした樹風からは山煙でも落ちてきそうである。

小高い丘を越すると、バツと眼前が明るく開けて、樹木に圍れた沼が白く光っている。静寂そのもの、様な密林の中で一

人の原始土人が一人餘念なくせつせと水浴をしているのだ。

私は大きなランブタンの樹に姿をかくして、その原始人の水浴しているのを眺めた。

幾分濁つた水が白い水滴となつて水面に躍つてゐる。若い男である。水中に潜るとブルブルと頭を上げて口から水を線のように吐いている。

彼等はサロンを用いて水浴をして絶対に他人に肌を見せないのだが、彼は人気がない個所なので安心したのか、私の方へ向つて沼の岸近く迄歩いてくると、濡れたサロンを脱いで立つたまゝ、でしぼっている。

斜陽を浴びて立つた彼の眞黒く焼けた逞ましい筋肉の裸體が私の眼前にひろげられた。

頸部の入墨からして、首狩の風習からして食人種として恐れられている山野彷徨の原始人イバン人(ダイヤ族)だ。

私と彼の間は少し距つてゐるのだが、彼等特有の性的秘具として用いられているものが、彼の男根に見受けられた。

それは私が前から本によつて、そんな風習のある事を知つていたし、

又ボルネオのクチン博物館の二階の中央部の陳列棚の中で見た木製の實物模型によつて知つていた。

その模型は、木を實物大の男根に模して彫つたものだが、その龜頭部を横断して眞鍮のポールが刺し込まれてゐるのだ。

始めてその模型を見た私は、如何に未開野蠻の原始人といつても、そんな亂暴なことは、しないだろうと半信半疑でゐたのだ。

それに今私の眼前に立つてゐる男は、それらしいものを装着してゐるではないか。

私の好奇心はムラ／＼と湧いた。尙もよく注意して見ていたが、彼はそのまゝ濡れたサロンで前を覆うてしまつた。

そして樹の枝にかけた彼等特有の鞭をしめようと、岸に上つたところ私は彼を驚かせない様に、相當の距離をひらいたまゝで

「煙草を喫まないか」と言葉をかけた。

突然異國人の私に言葉をかけられた彼は、ビクツとして逃げ腰で警戒をしたが、何によりも大好物の煙草を見せられたので、おす／＼と私に

近づいて、引つたくる様に煙草をとると、美味そうに吸いだした。

私は二三世間話のようなことを交わして馬來語の通ずることを確かめると、例のものを一目でいゝから見せて呉れないかと頼むと、彼はとんでもないとゆう顔付で

「これは今迄誰にも見せたことがないものだし、今迄誰も見せて呉れなんて言つた者はないが、貴方は何故此んなものを見たいと言ふのか」

「私はさうゆう風俗を研究しているからだ」

と言つたが、研究とゆう言葉の意味が十分のみ込めぬらし中々うんと言つてくれない。

そこで私は、香りの高いジャワ煙草二十本人の一箱を出して

「若しお前が私にその秘具を見せて呉れるなら、此の煙草一箱をやるがどうか」

たが、さて、サロンの裾をまくつてその性的秘具の装着されたものを見て呉れた。

情けなさそうな半泣きの顔を、そつぽ向けながら、時々、脇眼で私の方を覗いている。

私は初めて、妖具「カレン」の實物に接したのである。

私の見たのは、ボルネオのダイヤ族のイバン人であつたが、其の外カレン族にも又セレベス、ニューギニヤの奥地に住む土人にも此の風習が存しているとのことである。

名稱は所によつて、アンバラン、カレン、ウツタン、カンビ等と呼ばれている。

その構造を暗示するものとして、カンビと云うのに耳朶に穴を開けて耳飾りを通すとゆう意からきている。

又アンバランと云うのは横切るとゆう意である。實際馬來人の娘や、ダイヤ族の男達も耳朶に穴を開けていろいろの飾り物をつけている。

此の悲壯な秘具のとりつけの手術は、回教徒の割禮と同じく、思春期の青年に對して行ふ一種の成人式の様なものであるらしい。

それを行ふ前にカンボンの長老や勇武な者が立ち會つて、嚴肅な禮拜祈願が行われる。手術を一言にして述べ

ば、男根の龜頭部に穴を穿つて、その穴に細い棒を挿入して、その兩端にいろいろの飾り物の留めをつけて置くのである。私の見たのでは、水平に穴が開けられていた。

先づ手術に際しては、男根を伸して二枚の竹の篋で緊くはさみ、その兩端を紐で巻いて、數日間谷川の冷たい水に濕して置く、この二枚の竹片の中央には穴が穿つてある。

充分に冷して感覚が麻痺したところ、この竹の穴から、銀針か竹針の鋭利なもので突き刺し裏の竹穴迄貫き通す。次にその穴に油を塗つた竹の棒を挿入して、毎日これをとりかえて穴の癒着するのを防ぐのである。そして毎日清冽な谷川の水にて冷却するうち孔が癒り、癒着もせずに

丁度耳輪を嵌める耳朶の穴の様に丸い空洞が貫かれる。

これでこの怪奇悲壯な秘具の手術も終り、各自思ひを凝らした秘軸を作つて、各々の寸法に應じて適當の長さに装着する。

材は、銀、銅、竹、木、角、骨、龜甲等であつて、その兩端には滑らかな留金をつけ、一方はネジたしを取り外せるようにしてある。

中にはこの突起に十數條の紐をつけて、その端に滑らかな小さい貝類を結びついたり、小さい銀貨をネジ代りにとりつけたりしたのもある。

この様な形式の外に、縦横十文字に二本のカレンを挿入したものもあるが、それは殆んど稀である。

以上の様な悲慘な妖具の取付けが

終ると、完全に一人前の男子として妻を求める權利が生れるが、一方娘達も婚嫁に際して、この妖具の有無が第一條件とされている。

これを施していない男に對しては自由に離婚することが出来る程に、彼女達にとつても性的に重要な意味を持つてゐるものなのである。

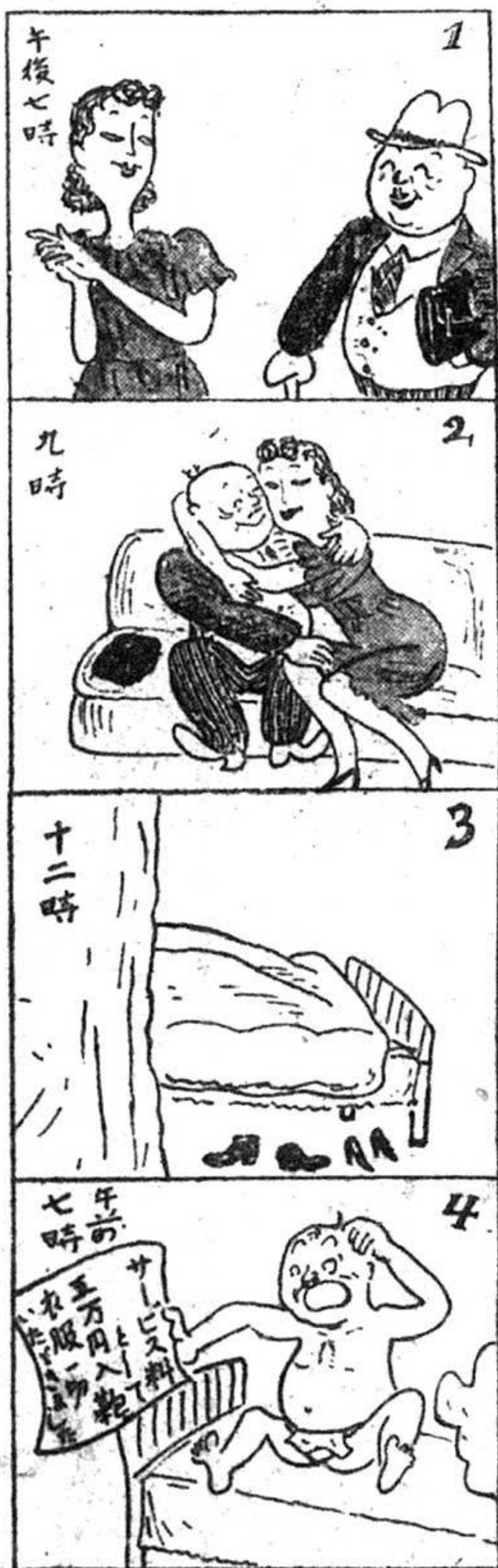
全世界に探ると性的亢進具なるものは各種多様なものが生れてはいるが、この原始人の如く悲壯な手術を敢てして、男の肉體に傷つけ苦痛を伴うものは稀である。

又同時に部落の女達が如何にこの秘具の装着されたものを渴望しているかと云うことも、その亢進具としての効果を確めるものである。

この風習を持つ部落の婦女子はこ

或る日の好色社長

南陽二畫



の秘具を欲めぬ男と結婚すること
は絶無であると言われている位
この秘具の充進効果を稱えている程
である。

原始社會に於て男性が女性獲得に
當つての唯一の條件は、強さと勇武
である。彼等社會での幸福は一にこ
の強さで購えるのであつて、勇武こ
そ原始人社會の唯一のものである。
娘が婿を求める際、首狩りした數
の多い男を選ぶと云うのも、その理
由は此邊に存している。

その一つの現れとして、この強さ
を男性が女性に示す手段、即ち苦痛
も平然として耐え得る、と云う忍耐
表示の風俗が生じた。

我が國の入墨なんかも、苦痛に耐
え得るとゆうのを自慢にして相手に
示したものであつて、その表示によ
つて相手方を威嚇すると同時に、勿
論異性に對しての見得も多分に含ま
れていたものである。

彼等原始人社會にも、この入墨の
風習が瀰漫しているが、これは外に
呪詛的な意味も多分に持つている。
妖習カレンの秘具もこの我慢の表
示が多分の因子となつていると同時
に、女性への性的刺戟補助として生
れたものである。

一割禮 [SUNAT]—

回教徒 (イスラム教) は、回教徒聖
典コーランの信條から、教祖マホメ
ットの教えによつて、イスラムの嚴
格な儀式によつて男子七才、女子五

才の時に割禮が行われる。

東印度地方の回教徒間に於ても、
盛んに割禮が行われ、彼等の間では
成人式の第一行事であり、同時に結
婚の準備工作ともなつていふのだ。

東印度地方で最も文化の進んでい
ると言われるジャワに於ても、今猶
盛んにこの風習が行われている。
彼等は、この儀式を *sunat* と呼んで
いる。割禮、包皮切斷、心身を清め
る等と言ふ意味を持つてゐる。

儀式の當日は男の子を盛裝させて
附近の寺院に詣らせ、親戚や知人の
實も訪れてその成人式のことを告げ
かえる。その夜割禮を受ける少年は
腰に新しいサロンを着け、身體全體
を黄色い粉で厚化粧をし、花冠、頸
飾り及び腕飾に白い、香の高い花を
飾つて、一見花嫁の様な装で、割禮
に經驗のあるブニヤキットの前に導
かれて、四邊壁のない家の前面の腰
掛に坐らせられ、大衆の面前で割禮を
行われる。

施術者が出て、包皮の先端を伸ば
して竹筥二枚で挟み、木の台の上に
て、竹刀か小刀で以て、その先端を
切り取るのである。

その傷あとには、血止めに用いら
れる花粉や植物の芽などをつけてお
く、女兒に對しては形式的に局部へ
切傷をつけておくだけである。

セーラム島の原始人の間では、女
兒に相當の傷をつけて嚴しい割禮の
儀式を行つてゐる所もあるが、この
あたりのカンボン部族では、よく木
の小枝でサロン (腰巻) の前を下か

ら持ち上げて、この割禮の傷ど布と
が擦れるのを防いでいる珍奇な姿を
見かけるのである。

割禮は回教徒の表象の如く考えら
れてゐるが、同教徒以外の原始人に
も相當廣範圍に行われてゐるらしい
用具は多くは、茅や竹筥を以て行
われているが、勿論我が國にもこの
割禮を行つた地方が相當あつたよう
である。

古代の宗教にはよく男女の性器に
傷をつけて、殆んど生殖不能に近い
状態までにし、墨丸を除去したり、
乳房を切り取つたり、男根を除去し
たりした事が言ひ傳へられてゐる。
こうした原因は、人體の中の性的
衝動に敏感な部分を除去し、傷ける
事によつて邪念から脱却し得るとい
う、宗教的信念から來たものである。
こうした生殖器刺戟の風と回教徒
の割禮とは、一連のつながりを持つ
てゐるようだが、この様に重い宗教
的意義を持たない原始人の間に行わ
れる割禮には他の性に歸因する事が
含まれてゐるのである。

回教徒の馬來人に何故割禮を行ふ
のかと尋ねて見たが、はつきりと答
えて呉れた者はなかつた。

包皮の一部を除去することによつ
て、包莖を防ぐための衛生的見地か
らと見る人もあるが、どうであらう
マホメットが割禮を規定したのは
アラビヤの砂漠を駱駝に乗つて、起
伏した丘を上つたり下つたりする所
より、乗り手の敏感な部分が刺戟さ
れ、あらぬ邪念に身を悩ますところ

から、その刺戟を受ける部分に傷を
つけて幾分なりとも軽減せしめるた
めから來てゐる、とも言われている
しかしこれは餘り考え過ぎた理由で
はなからうか。勿論この風習は回教
創始以前からあつたのは確かだ。

東印度のブルウあたりの一部では
少年の割禮を施したあとを母が口
含んで勞わり、切りとつた先端を同
年輩ぐらゐの女の子のある家の後
に埋めて置くやうな風習があるが、こ
れ等は、割禮と性との關連を物語る
ものである。

私の考えでは、宗教的信仰より來
た割禮そのものも、今は只習慣的な
儀式として、行われているに過ぎな
いのであろうが、又一面享樂的生活
を追求する彼等の要求に基いた性的
刺戟促進としての効果を狙つたもの
ではなからうか。
何れにしても妖奇に満ちた習慣風
俗である。

一屍と同衾する妖習—

遠く文化の歩みから取り残された
原始きながらの秘俗を擽して、今も
尙赤道直下の奇島セルベスの中央山
岳地帯の奥地に、自給自足の生活を
續けている民族がある。

結婚にも、出産にも、祝事も儀禮
も行わない彼等の間に於て、只死に
對してのみ一家一村を擧げて、賑わ
いをやると云うのは、實に不思議で
ある。

葬儀に對する彼等の興奮のさまは

男女口入

瓜屋

浅川 曉

終戦以來。世の中が一變してしまつて、戦前の様に、お上品に構えて金利や恩給で飯を喰つていた階級は猛烈なインフレに没落してしまつた。それに未曾有の戦争によつて生じた未亡人や婚期を夫つた老嬢たちがそのはけ口や喰ひ口を街に求めて、氾濫し、性道德の弛緩と共に、大混亂を續けているのが今の状態だ。闇成金とか新階級とか言われてゐる新興階級の一部の者達は、我が世の春を謳つてゐる。誤つた自由主義に躍つた二十歳前後の男女も、此の間に泥つて放蕩な生活をつゞけている。普通の町では満足しなくなつた漁業者共が、更に變つたもの強烈なものを求めて、變態的な暴露的なものが、街の中に溢れ出した。こうゆう私も、年に似合ふぬ好き者なのである。終戦後のドサクサに急速に建てられたタミナルに程近い開市街の或る喫茶店での話である。夕陽が淡く歩道にかけを投げる黄昏時であつた。一歩裏を見ればドブでメタン瓦斯がブツブツと出ようと

ゆう露地なのである。板張りの粗末な椅子に腰かけていた私は、見知らずの中年の男より言葉かけられた。袖だけ色の變つたジャンパーを着たその男によつて、私は大分鼻の下の長いやつと見られたわけだ。それは瓜屋とゆう男女の口入屋が此の近くにあるが行かないかと言ふのだ。私は前にもそんな話を聞いたことがあるので持前の奇癖よりして、早速承諾してその男と二人で連立つてその喫茶店を出たのであつた。郊外電車で十分ばかりの所、折柄のラツジュアワの人群れに押されながら、驛前の通へ吐き出された。此所は戦災をまぬがれた割合大きな市街が、罕の樹林に囲まれて續いてゐる。近邊の大都市は殆んど戦災を受けてゐるので、押し寄せた戦災者達で充滿してゐる焼けぶりの街だ。驛前に續く通りの歡樂街は、戦前に増した賑やかさで、大小諸々のブローカーや闇師達の活躍場所となつ

むしろ死を謳歌し歡喜してゐるとしか思われぬ。然しこの葬儀に對し全財産を空にしてまでそれを盛大にやるとゆう事は、一は來世、再生を確信してゐる故である。平素酷熱を耐えて田を耕し、水牛を飼ひ、布を織つて財を蓄える苦心も一つにこの葬儀を飾る準備工作とも言えるのである。先づ死人があると、家屋の中でも上座に當る場所に死體を横たえ、布ですつかり巻いて置くが、墓地へ運ぶ前にこうして屋内に長日月置く程自慢なのである。その間、村全體は勿論、遠く隣村からもやつて來た連中、連日連夜、黒水牛を屠つて食事を出し、バロの樹から採つた酒をふるまつて盛大な宴をはらなければならぬ。中には死體を三ヶ年も家に置いて連日宴を張つたので、何百頭の黒水牛を屠つたとゆう超豪華な噂も傳へられてゐるが、よほどの有難な王様でもない限りは眞似られないこと、大抵は長くとも數ヶ月とされてゐる。其の間、死體はどん／＼腐蝕して屍汁が布に浸み出るので、上へ上へと布を巻いて幾十幾百と重ねて遂にその太さ徑一米にも及ぶものがある。こうなると墓地へ運ぶにも、床の簀の子の一部を毀して出すとゆう騒ぎをやる事もある。そうして臭氣を防ぐためには屋内は香花香水で充たしてあるが、眩暈を感じるような異様な香のカクテルが、屋外にまで漂つてくるのである。

元來無宗教の原始人たる彼等は、死に對しては、深く來世を信じ、只肉體が變形するだけで、死人は依然として食事も執れば、生殖も行ふものと信じてゐる。そうして屋内に死體を置く間。それが夫の死であれば、妻は夫の死體に生前と同じく食事を供え、毎夜殆んど裸形となつて幾重にも布で巻いた死體を抱擁して、生ける生身に於けると同じ様に愛撫して裸身を死體に委ねるとゆうことである。この様な屍を擁して過す凄惨な習俗が今も猶、千古斧鉞を入れざる密林の彼方に行われてゐる。彼等民族の男女は、平然としかもそこに一種の情慾さゝ湧くと云つてゐるが、然し幾重にも巻いた布の奥深くにある死體を想起しつゝ抱くとゆうことは、心細く物足りないに違ひない。そうした不足を補う意味から、こゝにはベミヤと呼ぶ白木の彫刻假面が、人の死と同時につくられるが、此のデスマスクは勿論死者のありし日の容貌を偲び損じたものである。陽の假面には金屑で蛇の如き模様を飾りつけ、女の方には耳に穴を穿つて生前入れた耳輪等を嵌めて、その面さし等もやさしいものである。男女の假面には共に下の方へ細い棒をとりつけて、死體の布へ刺し込む様にしてある。こうして死體につけた白木の假面を夫と思ひ妻と信じ、生けるが如く毎夜、名残りを惜しみ煙草を愛撫する様は、怪奇極まりないものである。

ていた。

キヤベレー、バー、カフェー、映画館、飲食店といった遊興場所が軒を並べて増築され、それに伍してはやりのダンスホールが、一軒数百萬圓の巨費を投じて建築され、覆面の紳士や、怪しげな未亡人が入りびたりに踊り狂っている。

シモタ屋にダンス教授所の看板を掲げて年若い男女や、遊閑人種的好评を博しているのも、二三にとどまらなかった。

それと同時に、一步裏道へ入ると新圓即金融通、金貸します、古着高價買入れ、等の貼紙が辻々の電柱にはりめぐらされているのは、毎日のインフレに抗しきれぬ貧民生活者たちの姿も思いやられるのである。

私と連れ立った男は、此の街に一寸變つた面白い所があるとゆうのである。赤青のネオンのうづがゆれる電飾のほうと帯をなして放射する夜空には星が一つ二つ見える。

夕暮時から夜に入ろうとするひとときだ。私は其の男の後について、雑踏に揉まれながら、賑やかな映画館の筋を左へ折れて、薄暗いアスファルトの道を歩くと、電燈を入れたガラス張りの行燈に、瓜と貝の繪を浮き出して描いてある。

「ココだよ」

その男が頭をしやくつた。

丁度恰好がイキな旅館風である。

硝子格子の戸をガラリと開けると、玄關口に屏風があつて、なんとなく落ちついた静かな感じである。

四十近い小作りの女が無表情な顔を出して、男の顔を見ると案内して私を奥へ通じた。

お盆にお茶をのせて持つてきた先の女は「どちらにしましょうか」と瓜と貝の繪を持つてきた。

それは墨繪に淡く彩色を施した短冊風のものである。

その男の説明によると、此れが此所獨特の珍らしい仕かけであつて、瓜貝屋と言われる所以であるそうだが瓜はヅリで賣であり、貝はカイで賣である。即ちどちらでも、お望みに應じて轉換してくれるのである。

カイに依つて紹介される女は、令嬢風、學生風、未亡人風、玄人風、派手、地味、いろ／＼あるそうだが此の家の離れや二階にも、いくつもの部屋が、此れらの使用に當てられるために解放されてある。

女が呼ばれて来るためには、遅くとも二三時にて果される。若しお客が女であれば、此の反對で、紅顔の美少年から、中年紳士まで色とりどりのが待期している。

次にウリの方は、互に相手に買つて貰うわけで、此所に登録しておけば、お客があつた時呼んで貰えるし待つておれば、相手と呼んでも來れる。

然し如何にオバアちゃんでも辛棒して奉仕しなければならぬ。

又それだけの報酬、即ちサービス料を相手から貰えるわけだ。

精力絶倫な濃厚未亡人等の若い燕として可愛がられでもすると、それこそ三度の食事にも生卵がつこうとゆうもの。

ヅボラな遊蕩兒にはもつてこいの商賣ではないか、然し案外志願者は少いそう。

獵奇家として少しは名の知られてゐる私のことだ。

物は經驗と、そのウリの方を所望した。件の女はニヤリと笑いながら「暫くお待ち下さい」と言つて出て行つた。その男も用を果したためか、見えなくなつた。

入れ違ひに十四五のお下げをした瘦せた娘が餅菓子を持つてきた。

臺の上にござりと仰向けになつた私は、座蒲團を枕にして、男を買おうとゆう勇敢な女を、大きな好奇心を持つて待つていた。

此所の瓜と貝の暗示的な商標につられて來た私であるが、若しこの瓜貝屋が、私の趣向に投じたとすれば後日譚として皆様にお目見得することにする。

變態性慾者群像

(四)

アエチレックス 崇物性淫慾者

某廳の土木課員青木虎吉は、その職權を利用して、土木請負師に工事請負の便宜をはからつてやり、其の代償として多額の賄賂を受け、殆んど毎夜の如く足繁く花柳界に出入していた。そして彼は酒席に侍つた藝妓や酌婦に對して、彼女達がいやがるのを無理にその陰毛を抜きとるのを常としていた。

そうして平素同僚と雑談の末等には彼はいつも誇り顔に、某料理店の抱え藝妓誰々は赤毛であるとか、又某待合の酌婦何々は縮れ毛であるとか、誰某のは漆黒であるとか吹聴して得々としていた。

その被害は三十餘名の多數に上つた。其の後彼の收賄事件の曝露の際家宅搜索を受けた時、多數の書類の中の一冊を係員が開いて見ると、その手帳には、右の三十餘名の陰毛が一々丁寧に貼付されてあつて、しかも、何處の何子、何月何日抜きとると註釋まで附記されているのには、さすがの係員も、これには開いた口が塞ががらなかつたやうなことである。彼は時々その手帳を開けてみて獨りで楽しみ、その手帳を見ながらあれこれと想像するのが何よりの愉快であつたそう。

(變態性格者雜考より)

闇の女の生態

肉か金かはた戀か

夜の街にうごめく

△彼女の實話△

忍頂寺

穠



女教員より轉落して

生暖たかい新緑の夜風が吹く六月
初めの或る夜。阿倍野橋の陸橋を北
へ行く洋装の女があつた。雨模様
の空は重苦しく沈んで、省線天王寺驛
のイルミネーションが闇空に、妖し
く輝いている。
彼女は陸橋を渡り終えんと天王寺
公園の方へ行きかけた。と淡い電燈
に照らし出されたのは暗い木蔭より
突然四十近い太り肉の男が、彼女の
腕をつかまえた。
豫期していた事が余りにも早く實
現して彼女は、思わすブル／＼とふ
るえ無意識に握られた手を引き寄せ
ていた。

倒を見ながら、男勝りの教員として
率直にしていた。
長い戦争は終つた。待ちに待つた
兄が復員して、楽しい一家團圓の日
が訪れたが、母が病死し、兄に若い
後妻がくると、彼女は兄夫婦と別れ
て下宿することになった。
十年間の戦争は彼女の青春を完全
に奪つてしまつていた。一時降るほ
どあつた縁談も、三十過ぎた彼女に
は、今は儚かない夢であつた。母亡
き跡、彼女は只結婚を断念したオ
ルドミスとして、毎日子供と戯れる
のが唯一の慰めとなつていた。
然し肌を薄着をまとう頃となると

人一倍健康に恵まれた彼女の肉體が
波立つて燃え上つてくるのを、どう
することも出来なかつた。
唯わけもなく人戀しくて、強い力
で抱き潰してほしいような狂わしい
ばかりの衝動が身内をかきめぐるの
であつた。夕食後の黄昏時をフラフ
ラと足を向へ向けたのであつた。
「オイ遊ばう。怖わがらなくツたつ
ていゝぢやないか」
男の脂ギツタネバツコイ掌が彼女
の素肌に吸いついて離れようとしな
い。引きづり込まれるようにクタク
タと木蔭へくすれて男の胸に抱えら
れていつた。えゝどうでもなれ、と
ゆる自棄的なふてぶてしさと、享樂
的な好奇心に胸を躍らせて、男に誘
われるまゝ程近い安ホテルの一室に
おさまつていた。
煙草のヤニの臭のする男の體臭に
壓倒されて三十幾年眠り續けた彼女
の性慾は、甘美の焰に點火された。
薄い木壁にギシ／＼と鳴る粗末な木

製のベットの所で
彼女の處女は儚か
なく一夜にして散
つた。
始めて知つた感
覺の陶醉に眼が覺
めた彼女の手には
彼女が一ヶ月働いて手にする給料に
近い金額が握られていた。
夜の南大阪に出沒して、鼻の下の
長い紳士より、多額の金錢を巻き上
げる一見インテリ風の洋装の女性
は彼女、湯本清子(假名)のなれ果て
であつた。

主知らぬ

客の種を妊んだ

十四の娘

市電B停留所は、盛り場の近くに
あるので夜となつても乗り降りの客

があとを切らなかつた。

安全地帯に付んで客を求めている四五人の女は折柄取締りに来た係員に、賣淫現行犯として檢舉された。

その中の一人頼原美代(假名)は數え年僅か十四になつたばかりで既に誰とも主の判らぬ客の種を姦んでいた。取調べの係員に對して

「何處捕えられても喰えない以上は出て来たら又此の商賣を續けてゆくワ、お腹の子供が生れたら自分で育て、ゆくからイイ」

と放言して憚らない彼女も又どんな境遇の女であらうか。

關西本線の汽車がゴオツと通る度に家全體がグラグラと揺れる焼けたりの長屋の二階。廊下をつき當つた一番奥の部屋に通稱ヒヒ爺で通つてゐる煙草の立賣り屋が住んでいた。

便所の近くで梅雨時になると胸のムカつく様な悪臭が空全體に漂つてくるこの穴倉のようなねぐらへヒヒ爺が連れ込んだ女相手は、後家で目ツかちの四十四五の女、ボン引きのあばた面の女。垢だらけのルンペン女、煙草賣りで小金を溜めてゐる五十女等四五人で止まらなかつた。

この長屋の止宿人たちがひそかにヒヒ爺とあだ名している所以であつた。美代は戦災で両親を失い、戦災孤兒の收容所にいたのを抜け出して闇市に彷徨していたのを、このヒヒ爺

に拾われた。それは今年の春であつた。

毎日アベノの闇市へヒヒ爺と一緒に行くといくらかのビースやコロナを分けて貰つて賣つていた。そして夜は便所臭い昼の半分腐つたような四疊半の部屋でヒヒ爺の蒲團に入つて寝かされた。

美代が拾われてからヒヒ爺の女遊びは止まつた。時々煙草賣りを早く切り上げると、牛肉や葱を買つてきて美代と二人でつき合うことがあつた。そんな時、朝鮮人から濁酒を買つてきて、ヒツとする酸い匂いのするやつを立てつづけにあふると、陽にやけた顔を赤く染めて、美代を相手にふざけたりした。

梅雨が明けて西陽がたつた一つの窓よりさし込んでうでる様にムシ暑の日の夜。美代は、ズロース一つになつて薄べりのような蒲團にころがっていた。新世界の立喰屋で焼酎を飲んで来たヒヒ爺は、部屋に歸つて美代の裸身の寝姿を見るとギラ／＼と好色的な眼を輝やかした。

その夜美代はヒヒ爺のために、處女を奪われてしまつた。ヒヒ爺のためには無理に女にさせられた美代は、いつまでも、その穴倉の中にはいなかった。ヒヒ爺よりもつと若い元氣のある男を求めて地下鐵の出口附近に佇むようになった。

その界限に果喰う餌の兄ちゃん連中は、美代のまた子供じみたそれを見て一通りの技巧は心得えた稚態を愛して、公園の芝生や饒綿の草叢の中で美代を愛撫した。

その中に美代は金の有りそうな男

パンパン宿に見る女

天下茶屋に住む友達を梅子が訪れたのは近くのお寺の森でつくつく法師の鳴く八月の終りであつた。

梅子の夫は先妻の女の子を一人残して出征したまゝ南方のジャングルでマラリヤのため病死してしまつた。夫の歸還を唯一の頼みの綱として賣り喰ひの困窮生活を續けていた梅子であつたが公報が来て夫の死亡が確認されると共に根も張りもつき果てしまつた。

夫の両親は先妻の子供を引きとると梅子を路傍の人として追い出してしまつた。梅子は住み馴れた家を出て、さし當つて住む家もないので君代を訪れたのであつた。

君代も又夫が満洲へ行つたまゝ歸えらず十七になる妹と共に暮らしているのであつた。梅子と君代は二人がまだ結婚しない前に同じ工場に勤めていた時からの友達であつた。

君代を訪れた梅子は玄關とゆうよりむしろ裏口と言つた露地の奥の共

を旅館へ引きづり込んで金を巻き上げる事を覚えた。秋風が吹く頃、美代は前と見違えるほど身なりも容貌も美しくなつていた。

しかし其の頃、美代の身體には主の分らぬ種が宿されていたのだつた

同水道の前で君代とばつたり顔を合

着のみ着のまゝで風呂敷包一つを抱えた梅子の姿を眺めた君代は早速奥の部屋へ梅子を連れてゆくと「あんたも苦勞したようね」と同情的な眼ざしでじろ／＼と眺めた。梅子が夫の病死のことや身のふり方に困つて宿をかはしてほしいことを頼むと

「それはいゝけれど、あんた此れから一體どうして食べてゆくのか」そう君代に尋ねられて梅子は急に答えられなかつた。

「まあ兎に角内に泊りなさい」君代の言葉によつて梅子は一先ず此の家身を寄せることになつた。君代と妹の二人が住んでゐるには、部屋の数が多過ぎると思つたら、その中梅子の知らない若い女が三人ばかり歸つて来た。

家の入口は普通のシモダヤでとても部屋が三つ四つもありそうにも思

異國

變態風呂

めぐり

青木

富兒



えなかつたが、隣りの家へも裏庭から通じてあつて室数は十以上もあるのだつた。

まだ残暑のきびしい夕方。浴衣がけや、カッターシャツ姿の若い男達が幾人も、その頭のつかえるようなくぐり戸をくぐつて家の中へ入つて来た。君代は何かそれらの男と話し合つていたが、やがて男と女は手を取りあつて後の部屋へ消えて行つた。十七になる君代の妹も髪を断髪にして圓いふつくらしした頬に紅をはいでそれらの男達に混つて、キャツキャツとふざけていた。

その中の男は梅子の方を指さして露骨な眼を向けるのであつた。

夫が出征して以来。そんな事に無關心だつた梅子にも、若い男や女たちの戯れる姿を目の前に見せつけられると、自然と胸が高かぶつてくるのだつた。

翌朝。君代の話では此所へ来る女の殆んどは戦争によつて夫や愛人を失つた者との事であつた。

梅子も君代から借りた金でパーマネットをかけていた。そして口紅や白粉をはくと、自分でもまだこんな若さが残つていたのかと驚くくらい若々しく見えた。

夫と同棲した一年足らずの思い出が梅子の胸を熱くしその夜から客の男に抱かれていた梅子であつた。

夏の夕方、銭湯の前を通つたら、金盥を抱えた女がのれんを分けては入ろうとする。同時に湯をすました女がガラス戸を引き開けて出ようとする。

その瞬間。僕の放射的眼光は、湯氣のこもつた浴場にうごめく幾人かのハダカを見る。こんなあけ放した風景は、日本以意どこにもないだろう。

色街の附近で立喰ひした時。そこのおかみさんが、諸々の男に肌をの

るすことが稼業である女郎なるものが、如何に勇敢に銭湯へとび込んでくるかを語つていた。

ひらりと着物を脱いで手拭を頸に巻きつけ、煙草をくわえ、大手をふつて飛び込んでくる。そのまゝさん

ぶり滑りこむと、湯槽のふちへ腕をかけて身體を浮かしながら鼻歌を唄う。どうかすると「足がだるい」と言つて片足を湯槽のふちふかけているそう。

熱帯の未開人の或る一部を除けば

日本人位ハダカに對して寛大な人種もなからう。夏の夜禪一ツで街頭將棋を指しているかと思えば、裏へゆくと女中が行水している。

夏の夕暮場末の長屋街を通れば女のハダカはいくらでも見られる。

今年の夏、關西本線で湊町を經つて天王寺へ着く迄、あの薄汚い家並の便所脇では頻りに女が行水しているのを見た。車窓から浴水する女を見るのが出来るのは日本だけだろう。

猛暑の熱帯樹に囲れた小川に水浴するマライ人の小娘でさえ、サロンを用いて絶対に肌を人に見せることはしない。まして中國の盛夏にても例え場末とは言え女のハダカを見ることは絶無といつていい位マレである。然し日本の家庭では、親子兄弟友達、老若男女の別なく、平氣で一

緒に浴室へとび込む。特に日本の温泉は、至る處騒々たる温泉氣分が漂つている。廣々とした明るい浴場には年中コン／＼と湯

が湧いている。

外國では佛蘭西にヴィシーとか、エヴィアンとか、ヴィツテル、南獨逸には有名な湯の町バーテン・バーデンがある。勿論温泉ではなく源泉だから、例え風光や設備萬端の優秀はあるとしても、それを沸かしている錢湯えゆくわけだし、ホテルの湯にしても單なるホテル浴場であつて日本のように男女混浴で

「い、お天氣ですねえ」なんて挨拶しているわけではない。

僕が浴場の名に於て最も氣に入つたのは、ダージリンのホテルの三階浴場である。二重窓の内側戸であるスリガラス戸をはねると、窓一ぱい銀雪に輝くカンチンジュンガ峰が見えていた。千古の雪を宿すヒマラヤ連峯を眺めながら、浴槽の中に寝ころぶとゆうことは、世にも贅澤な享樂である。

中國には盆湯がある。昔は盆を使つたらしいが、今では西洋湯槽を使つている。楊子江の濁流の唸りと、明笛やチャルメラの音などを聴きながら、この盆湯に寝轉んでいると、とてもものんびりしてゐる。浴客自身洗うのは顔部だけで、湯槽の吊枕に浮き寝たまゝ、首から下は全部三助が洗つてくれる。

そして時々蒸タオルで三助の助手が顔を拭いてくれる。その上緑茶を



運んでくる。湯槽の中に寝轉んで緑茶をすするのは中國だけだろう。

印度の湯屋の三助の按摩はどう考へたつて、手で揉むのではない足でやるのだ。足でうまく按摩ができる筈がない。その踵で容赦なく僕の肩をける。蹴つて蹴つて蹴り通す。これでは、如何に氣の長い者でも辛棒が出来なくて叱り出す。

フランスの浴場の美爪師は、客の化粧をしながら時々「貴方お獨りなの？」なんて訊ねている。

トルコ風呂は世に有名である。最早や日本にも一ツ位出現しそうなものである。巴里、柏林にもある。普通旅人がガイドによつて案内されるトルコ風呂は、女が附物である。埃及ではアラブ風呂と稱している。僕はカイロで純アラビヤ人の行く

アラブ風呂へ行つてみたが、薄汚なくて止して下駄のようなスリッパが並べてあつて、隅の方にアラビヤ油燈が點つていた。寢台のようなもの置いてあつた。どうせあの浴場で寢倒れて、夢のうちに蒸されて、三助から垢をこすつて貰

つて、按摩をして貰つて體を湯で洗つて、それから別室で茶か酒か料理を注文して、女を呼ぶとゆう順序である。疲勞回復には適切かも知れないが、志氣を眠らす眠劑であり媚藥である。だが僕が印度のトルコ風呂で、足蹴り按摩に僻易した後で、間もなく無斷で二人のハダカ女が影のように入つてきた。

一人はパンのように肥つていて、一人は竹のように細つていた。そして一人はニヤニヤ笑つていて、一人はギロツと眼をむいていた。むろん二人共現地人である。その土銅色の肌は薄暗く湯氣の籠つた浴室では、カビの生えたキノコの様に見えた。清流のせせらぎに曙の眞珠色に輝くハダカを見る日本の温泉とは大變な違いである。

次にストツクホルムの錢湯の話だ。ストツクホルムへ着くと、僕はひまを見て、スエーデンの三名物の一つである錢湯へ行つてみた。堂々たる三層樓で、僕は一番安い三等浴券を買つて入つて行つた。丁度スベインの家屋のように、その内部は三層迄突抜けていて、ガラス屋根だつた。だから僕は其の明るい白タイルの上を奥の方へ歩いて行つて、指定のドアを開けて一歩踏みこんだ。

華暗く小狭い室で、兩壁の脱衣箱に洋服が脱ぎ捨てゝある。七八足の靴が並んでいる。だが不思議に森閑と静まりかゝつてゐる。薄氣味が悪い。だから僕は忍び足で棚と棚との間を奥へ進んで、ソツとカーテンをはねると、ソコハ集浴場で、白雪のような體のスエーデン人が七八人湯の中に沈んでいる。

素より僕は集浴とは知らなかつた。どうせ歐洲だから單驅入浴だと思つていた。だから僕はカーテンから身をひいた。入浴を止すことに決めた。するとあの温泉にして誠實なスエーデン人が、ハダカのまま脱衣場へ押し寄せてきた。少々愕いた。

スエーデン語だからわからない。だが彼等はその眼を光らせ、口を突き出して、勝手／＼に殆んど同時に

「オランダ語が話せるか」フラン

英語が話せるか—英語が話せるか—
と言った。

だから僕は「英語なら解る」と答えた。するとその英語の男が僕の前に立つた。むろんスツバダカである

「君は一體ドコ人だ？」

「日本人だ」
「日本人か。そりやいい。だが一體なぜ入浴しないのか？」

「僕は集浴は好かない」

「そりや君の國には集浴の習慣はないかも知れないが、清潔だよ、心配しないでもいいよ。それに君がソコのトコを出すのが恥しいのなら、こうしてネ、このように、タオルを腰に巻いて入れればいいのさ。さあ這入り給え」

「折角だが僕はやめておく」

すると彼はスエーデン語で他の五人のハダカ男達へ僕の強固なる辭退の意志をつたえた。すると今度は、みんなが僕の手や肩に手をあて、スエーデン語で「はいはいはい」とすゝめる。腰にタオルを巻いているのは、英語男だけである。

「御厚志は有難いが、矢張り僕はやめておく」

そして僕はその三人に握手を交わしてその脱衣室を出た。すると又英語男が、ドアから半身をのり出して「ねえ君、ココは三等浴場なんだ單浴なら一等券を買い給え。だがど

うせ同じだからココえ入り給えヨ」

實に温良で誠實の心に満ちている

僕は集浴をよして一等券に買換えた。二階へ上ると、その廊下は清潔で、完全に病院の感じである。やはり看護婦のように白い着物を着た女が二人やつてきた。むろん女の三助なんだから、兩袖は腕のところまで押上げてゐる。

ミドリは腫の血走つた四十五六の女が僕の係りで、さながら女力士である。ニヤニヤ笑つてゐる。「變だぞ」と思つた。そして切符を受けとつて直ぐ隣りの脱衣場へ案内してくれた。貴重品を預け洋服を脱ぎ浴場へ入つた。

湯はぬるかつた。とてもぬるい。僕は手を伸ばして、勝手に湯の栓を捻じた。すると彼女はその怪力で僕の腕をつかんで湯をとめてしまつた。だが僕は極力彼女に抵抗して湯の栓をねち、熱湯が溢れ出た。彼女は額に汗を浮かべてあきれかえつてゐた。

そして湯加減をしらべて平氣で飛び込んだのを見て、「これは人間の風呂ではない」と言つてゐた。

巨軀を揺つて出て行つた彼女は廊下で他の女三助と頻りにしやべつてゐる。多分僕の湯の温度のことを言つてゐるのだろう。

間もなく彼女がもどつて來た。そ

して僕の肩へ手をかけて無難作に押し寝かして了つた。全く怪力である。時間がきて僕はまたタオルの浴衣を着て彼女の案内で、廊下へ出て、また別室へ入つた。だが驚いた。これでは完全に手術室である。光線の入る窓があつて、中央にタオルの敷いた手術台がある。「寝ろ」とゆうから按摩だと思つて、寝衣のまゝ寝ころぼうとすると、彼女は寝衣をはね脱がせてしまつた。僕はスツバダカで、この手術台に寝ころんでしまつた。

腰の部分へ小型のタオルをかけてくれた。すると彼女は石鹼水を入れた大きなバケツを二つ提げてきた。大きい海綿を二つその中へ投げ込むと僕をうつぶせにして、石鹼水を吸収した海綿を握つて肩のトコから洗い始めた。「痛いッ」彼女には日本語は通じない。

容赦なくゴシゴシ腰の方を洗つて行つた。まるで洗濯物だ。「痛い」といつて身體を持ち上げると、彼女はグツと押えつける。然し腹部の方は案外女性的に弱々しく洗つてくれた。次は按摩だ、僕はとても猛烈な按摩に頭がクラクラした。

僕は彼女に連れられて元の浴場へ戻り、石鹼を洗い落し。拭いて洋服を着、儀禮として彼女に幾許かのチップを渡した。すると彼女は、その

チップを左掌に受けとり「有難う」といつて微笑みながら右掌で軽く僕の頬を撫でた。彼女は僕を十七八歳の青年だと思つてゐたらしい。

拾萬圓

ヤミ女の貯蓄王

神山 榮三

上野の一斉取締りの網にかつた女の中に、これは又凄く千八百圓ベイスなんのその十萬圓の貯金をしてゐた女があつた。

西宮市生れ森田文子(二二)は大阪府立高女を卒業して松山師範に在學中、戦災で家財を焼失し父母も亡くしてしまつた。

一人の兄は陸大出でパラオ島にて行方不明。横濱署の立川警部をたよつて上京したが、訪ねる人は何處に居るかわからず、悲嘆にくれたあげく、生活に困つて、昨年八月から上野で夜の花として働くようになった。美貌に集まる男たちから得た金を根よく貯蓄して、一年間に貯めた金なんと十萬と五千圓。

これを安田銀行に貯金して、しかも渋谷に十五坪の土地を買つて、今は此所に建てる家の建築費を稼ぐために、夜毎肉を賣つてゐるとゆう。何んと又驚いた娘さんではないか

僕の男妾の告白

中原 春 美

其の頃僕は市内の商業學校に通つていた、たしか五年生であつた、家には自動車の運転手をしている兄と若い嫂と僕の三人が住んでいた。

両親はもうとつと死んでしまつて、僕は兄の給料によつて學校へやつて貰つていた。しかし兄の収入とゆうのは、僅かの給料と手當だけであつたので、兄は好きな晩酌さえも控へ目にして僕の學費を出してくれていたのだ。

このつましい兄の家計の大きな負擔となつてゐる僕であつたので、早く卒業してどこかの商事會社へでも勤めて獨立したいと常々願つていた。

それが意外なことから案外早く兄の家を出ることになつてしまつた。それは此れから述べる僕の男妾の告白と大いに關係のあることなのである。僕が兄の家を出て獨立したいと願つたことは、兄の収入の少ないとゆうこと以外に、僕が毎晩氣を使わなくてはならないことが一つあつた。前にも言つた様に兄は薄給の上に僕の學費まで出してゐて呉れたので

一軒の家を借りる事も出来ず、或る煙草屋の二階を賃して貰つて住んでいた。二階は三疊が梯子段の上り口でありその隣りに六疊一室があつた。兄夫婦は六疊に、僕は入口の三疊に寝ていた。僕が五年生になつて間のない或る春の夜、床に入つたまゝ寝られないうちに長い間天井を見つめたまゝで眼を開いていた。

近くの省線電車の音が間違ふになつたのは、もう大分夜も更けたのだらう。隣りの室の間には破れ襖があるばかりで嫂のささやく聲が手にとる様に隙れ聞えてきた。

「康夫さんが起きてるわよ」
「もうとつとくに寝入つてるよ、いいぢやないか」

兄の太い聲も混つてゐる。寢ようと焦るが内氣で氣の弱い僕も思春期を迎えているので、惱ましい幻想にさいなまれ眼がさえず中々寝つくどころの騒ぎではない。身動きもならずちつと身體を固くして目をつむつてゐるが、聞かないとしても耳からは隣室からはいろいろな物音や低い話聲が絶え間なく聞えてくる。

それでも隣室に寝ている時はまたよかつたが、夏を迎えて蚊帳が一張しかない爲に、僕も兄夫婦の片隅で同じ蚊帳の中に寝ることになつた。晝の太陽に焼けた屋根は中々夜となつても冷えず只さゝ寢苦しい天井の低い中二階の部屋である。

夜半にふと寢覺めた僕の隣りで兄夫婦のつましい睦言を聞くのは耐えられなかつた。

内氣で非社交的な僕ではあつたが時折り友人の家へ泊つたりしたことあつた。そして平常の僕の孤獨さは益々ひどくなつて、嫂とも殆んど必要以外は話もしない位無口で、ひまさえあれば小説に讀み耽つていた。それでいて僕と年齢の余り違わぬい嫂の若々しい肉體にまぶしい様なあこがれをどうすることも出来なかつた。

映画を見たり喫茶店へ行つたりすることがはやつていたが、そんな事に使う金などもなく、登校の電車賃も兄に言つて貰うのが氣がねで、停留所が五つばかりある間を歩いて通つたりしていた。

途中に大きな公園があつて、その中の道を通ると大分近道であつた。歸り道など時間があると、公園のベンチに腰をかけたり、芝生の木蔭に寝ころんだりして岩波文庫に讀みふけた。

氷屋の旗が方々にチラ／＼し出した七月のはじめ、僕は學校の歸り途を例のように公園の中に選んで、明るい緑の光線の反射する樹立の中を歩いて行つた。

植物園の前には大きな樟の木があつて木蔭を作つていた。僕はその下のベンチに腰かけて、やがて近づいて来る學期末試験の下調べをしようと思つた。

狭く暑苦しい家へ歸つても、思う様に勉強出来ないように思えたからであるし、又僕の孤獨性が然らしめたのかも知れない。さすがに季節はすれで人通りも少なくなつたが、蟬取りの子供が三四人樹立の間を行つたり來たりしてゐた。

冷やつとする涼しい風に汗を入れ僕は靴から代數の教科書を出すと試験範圍のところの練習題をやり出

した。と僕の後から五十近い上品な婦人が近づいてきた。

「學生さん、御勉強ですか」

と突然僕に話かけた。僕は人一番はにかみ屋で、それに見ず知らずの婦人から言葉をかけられたので、びつくりして「あ、」と返事しただけであわて、本に目を落した。

婦人は人なつこい瞳で更に學校とか家のことを尋ねたので、僕は内心淋しい孤獨をかこつていた時なので、思わず口が軽くなつて、いろいろ家庭の事情ばかりでなしに、自分の考え等さえも話した。

その婦人は、僕の話に熱心に聞き非常に喜んで、あなたさえよければ私の家から學校へ通つて下さつてもいい。私には一人の娘があるのだが或る事情で學校へやれぬので、家庭教師として來て呉れぬか、とゆうことであつた。

いくらなんでも僕はそんな突然の申出を受けようとは思わなかつたが兄の負擔や家の事情を思うと、このやさしそうな婦人の申出をむげに斷るのも惜しいようで、兄と相談して返事するとゆうと、その婦人は是非來てくれと言つて、紙に書いた所書きを渡して行つた。

僕は歸途兄に相談する言葉をあれこれ考へている中に、もうあの婦人の家へ厄介になる氣持になつていた

あの婦人の言つたように、もし都合が悪ければ夏休みだけでも、あの婦人の家へ止宿してもよいと思つた

次の日曜日の朝早く、もうちりちりと夏の陽が照り出した街の中を、あの婦人の書いてくれた所書きを目あてに家を捜していた。その邊は、高臺の住宅街で大きな塀をめぐらした家が並んでいて一寸尋ねることも出來ない位の上品に構えた家ばかりの所であつた。

その附近をうろろして、やつと求める家を見つけたのは、晝近くであつた。立派な冠木門に、立花寓と表札が掲げてあつた。

僕はくぐり戸より入つて白蝶花の植わつてある石疊の道を玄關に出て案内を乞うた。そして泉水や植込のある廣い庭に面した室に案内された。前に逢つた婦人が出て來て、僕を埋まるような安樂椅子に座らして、コーヒや菓子や女中に持つて來させた。その部屋の調度やビカビカ光つた廊下等を見ると、僕は自分のベラ／＼の夏の學生服がみすばらしく見えて仕方がなかつた。

明け放つた硝子戸からは、ダリヤやカンナ鳳仙花のむせる様な匂が室に漂つて來た。

婦人は遠慮する僕を無理にすゝめて風呂へ案内した。生れてから僕は晝風呂なんて入つたこともなかつた

總繪の豪華な湯槽、タイル張りの清潔な流し場、天窗よりさし込む明るい光が線となつて注いでくる。

僕は久しぶりに伸々した氣持になつて風呂を出た。今迄食べたこともない厚いビフテキや海老のフライを御馳走になつて、くつろいでいる所へ、婦人と一緒にその娘とゆうのが連れられて來た。

婦人が自分の娘は或る事情で學校へやれないと言ふ理由がその娘と會つて始めてわかつた。

顔や手足の肌は抜けるように白く病的な弱々しさが全身を包んでいた背骨が曲つているので身丈が低く小柄ではあるが、顔を見ると二十歳を過ぎてゐる様にも思えた。

彼女は僕を見て恥じらう様に頬を染めて僕の前の椅子に腰かけた。母親たる婦人は僕に彼女の勉強友達、遊び友達となつて呉れとゆうのであつた。彼女の名は立花文子と見た。

「これが此んな身體なので小學校へもやらすつと家庭で勉強させたのですが、外へ出るのを嫌がつてどうもやはり健康に悪いので、此頃では庭の中を散歩させるようにしていただきますのよ。」

婦人の依頼によつて、僕は翌日より立花家に起居して學校へ通ふことになつた。僕に與えられた部屋は二

江戸小唄

色男客物語

去る家の娼妓たち、夜みせまえに一所へあつまり、此ごろは色男にさつぱり縁がございせんが、百物がたりをしますと、化物が出ると申しますから、客物がたりをしましたら客人がきましようから、意氣な人の咄ばかりしましょうと、車座になつて、色男の噂ばなしを一つはなししては行燈へ灯を一つともし、二つ話しては、二つともし、だん／＼話しては明りを増し、とう／＼九十九すち話して、百すちになる時、夜店を知らせる鈴の音が、がらん／＼と聞えると、二階のはしごをばた／＼上るのを見れば、ひつこ抜き色男四五人、客物語の座敷へ入つてきた。

おいらん達はきもをつぶし、もしお前さん方、どこからおいでになりましたと聞くと、かの男どもは、わたしどもは、おはなしに引かれてきた客物語の幽霊サ。

「何に馬鹿らしい、お前さん方のような意氣でどこもかも満足なはつきりとした幽霊がございますものか」

「イ、エ、これでもお前がたにのばせて來たゆうれいサ」「なぜ」「ハテ、腰から下はおるすたものを」

階の南向きの部屋で、明るく廣々と
していた。

自由に好きな本も讀めて食べ物も
よく僕は幸福であつた。文子の室に
はいろ／＼の本がぎっしり詰つた書
架があつて、特に彼女が文學の本を
好んで讀んでゐることが見受けられ
た。

彼女の知識には片寄つたところが
あつて數學とか理化の方面には殆ん
どと言つていい位興味を持つていな
かつた。

その中に夏休みが來た、僕は一度
兄の家へ歸つたとき引き續いて立花
家に寄寓していた。

朝起きてから寝る迄僕はずつと文
子の傍にいた。強い陽をさけて樹蔭
を散歩したりまた朝露に濡れてゐる
芝生の上を素足で走り廻つたりして
青白かつた文子の顔もほんのりと紅
を帯びて來た。今迄物におびえたよ
うで陰鬱だつた彼も女愉快に笑つた
り僕にだけは、快活になんでも打ち
明ける様になつた。

文子の亡くなつたお父さんの弟と
ゆう人が、立花家の財産を管理して
いるとかで、時々顔を見せる外は、
餘り人も訪ねて來ないようであつた
庭の片隅にある下男部屋に老人夫婦
が住んでいて、庭の手入れや雑用に
使われていた。

三十過ぎた女中が二人いる外はこ

の廣い邸宅には人の氣はなかつた。
本を讀んだり草花の手入れに倦き
ると文子と二人でピアノを弾いて唱
歌を唱つたりした。

文子が歌をうたうなんてゆうこと
は今迄にないことだと言つて婦人は
僕と文子が仲よくなつてゆくのを樂
しんで眺めた。

文子もまた「康夫さん康夫さん」
と言つてどんな時でも僕を離さな
かつた。一ヶ月の夏休みが終る頃にな
ると文子は風呂へ入るのにも僕を呼
び入れるのであつた。

僕は恥しくて躊躇していたが婦人
のたつての願ひに、今迄女中が面倒
見ていた文子の入浴中の世話迄僕が
することになつた。

最近めき／＼元氣になつた文子の
身體はもう一人前に發達して、生れ
つき色の白い肌にはほんのりと血色を
帯びて見違えるように嬌らしくなつ
ていた。大分肥つてきたようだつた
僕は文子の背中から足の先迄洗つ
てやるのだつた。夜一人で寝るのが
淋しいとゆうので、僕の室のベット
を運んで文子のベットと並べて寝る
ことになつた。

電気スタンドを頭の所へ取りつけ
て、文子が寝付くまで小説を讀んだ
り、物語りをしたりした。

新學期が始まつて、僕は買つて貰
つた眞新しい自轉車に乗つて通學し

た。時折り兄の家へ自轉車を走らせ
て婦人の厚意の品物を届けたりした
學校がひけると僕は取るものも取
りあえず歸郷して文子の相手をした
僕が歸ると文子は不自由な身體で
迎えに來て一緒に家へ入るのであつ
た。又或る時は庭で爺やと花いちぢり
をしていて、歸つたまゝで僕も仲間
入りすることがあつた。

僕が立花家へ泊るようになって暫
くして婦人はよく外出する様になつ
ていた。それで尙更文子は僕がいな
いと淋しがつて仕方がなかつた。

十九の春、僕の商業學校の卒業期
も近づいた。許せば文科系統の上級
學校へ進みたかつたが、今の僕の立
場ではあからさまに、そんな願ひを
言うことも出來ず迷つていた。

まだ肌寒い日が續く三月の初め婦
人はそつと僕を一人應接室へ呼んで
「文子があんなに貴方を慕つてゐる
のがいぢらしく、貴方が卒業されて
からも、今迄以上に親密にしてはし
い。あれの父の残して行つた財産は
今礦山會社の重役をしてゐる叔父が
管理してゐますので、生活に困るこ
ともありません、どうかお願いしま
すから文子の面倒を見てやつて下さ
い。」

と言うのであつた。三月の末僕は
卒業した。婦人のすすめで、文子を
連れんと武田尾温泉へ出かけた。

「肉蒲團の行方」

— 耶蒲緑の翻譯過程 —

豊範文庫主人

中國の稗史小説が、日本にもたら
されて以來、その翻譯が盛んになつ
たのは元祿初年より寛政年間迄のお
よそ百年間であつた。

此れら翻譯流行の波に乗つて、稗
史小説以外の睡淫書なる艶笑本も、
御多分にもれず數多公刊乃至私刊さ
れて一部の好事者間にもてはやされ
たものであつた。

本書もその一つであつて、原名は
「耶蒲緑」「覺悟譚」又は「繪圖風
流奇談」とも名付けられ、中國の清
朝中期に著作されたものであつた。
日本に渡來したのは何時頃であつ
たかは不明であるが、日本で本書が
公然と板木に上梓され、題名も「肉
蒲團」と改められ訓點を施して發賣
の許可されたのは寶曆七年九月であ
る。この最初の訓點者は丹後宮津の
漢學に造詣の深い陶山尚善とゆう人
物である。版元は大阪順慶町五丁目
教養屋九兵衛、大本四冊物に仕立て
られて、讀みよい様になつて始めて
お目見得をした。

しかし此れは一部の學者や漢學の
素養のある人達に珍重されるのみで

近くで静かなとゆう所から選んだのであつた。大阪驛迄自動車を行かせ、それから二等車に席を占めていた。家を出る時に、婦人や爺に見送られて、二人はまるで新婚旅行に出かける様な気分であつた。

二人寄り添つて座席に並ぶと心の中にはほのぼのとしたものゝ湧き上つて来るのであつた。

婦人が特に二人きりで温泉へやるとゆうことは意味のあることであつた。それは僕が特に婦人と或る種金銭上の約束をしたことであつた。僕が婦人とそんな約束をしたことは、立花家の背後にある一生費しても使いきれない程の財産が大きな魅力となつていたことはいなめなかつた。勿論文子とゆう女性も索かされる點の皆無とゆうわけではなかつたが、若し文子が無一文であつたとしたら僕は婦人の願ひを承諾しなかつたかも知れない。

二人を乗せた汽車は溪流を眺めつゝ、斷崖を走つて武田尾についた。前から知らせてあつた温泉旅館からは迎えの人が来て、下へも置かぬ待遇の仕方であつた。

宿にくつろいだ二人は、先づ例の様に一緒に温泉に浸つた。

旅の温泉に在るとゆうことが二人を一層隔てなく親密にさせた。其の夜僕は文子と初めて愛を交わ

した。それは婦人との約束通りの行動であつた。文子もまた母親から聞かされていたのかも知れない。

それから十日間の滞在は、二人にとつては夢幻と愉快の連続であつた。初めて知つた喜びに、初心な二人は只盲目的に追求するばかりであつた。そして僕は文子の底知れない慾望の根強さについても知らされた。

世間より隔絶された不具娘の一點に集中した執念は恐ろしいばかりであつた。夜ばかりではなしに、晝も閉ざされた部屋に於て文子の相手をしなければならなかつた。

身も心も疲れ果て、僕は文子を連れて邸へ歸つた。

初め抱いていた向學の念もいつしか消え失せて、生活の安易と性の妖魔に感服した僕は、あれ程好きだつた文學書を讀むでもなく、朝つばらからウイスキーの瓶を開けたりしてゐた。

狂熱的にまで執拗な文子と共に生活して、僕もその痺れるような末梢神經の陶酔から彼女を忘れられないものになつてゐた。

晝は映画や芝居に閑をつぶし、夜は酒精飲料や麻雀に理性をとろかし、文子との狂態をくりかえしてゐた。婦人は「文子が初めて女としての喜びに浸ることが出来るようになつた」と言つて喜んだ。

こうして一年は夢の如く過ぎ去つたが、僕は働くでもなく立花家に身を寄せたまゝ、文子の相手をして過してゐた。

美食と飽食と生活の安易とは、骨の髄まで僕を墮落させてしまつた。只日夜青白い妖魔文子の男妾として精力を果すだけに過ぎなかつた。或時は文子の貪慾なばかりの執拗さに厭惡を感じることはあつても、こばみ通すことが出来る情性的に従つてゆく僕であつた。

然し此の變態的な生活にも終止符が打たれる時が来た。徴兵検査の結果甲種合格となつた僕は、其の年の秋入營した。

華北より比島、それからニューギニアと轉戦して苛烈な辛酸をなめながら、終戦後一年八月目に、やつと解放されて懐しの日本の土を踏むことが出来た。

下町にあつた兄の家は勿論焼けていた。せめて山の手の立花家でも残つていればと重い足をひきつづつて訪ねてみたが、昔の住宅街も今は一望の焼野原で、雜草に埋まつてゐる。

僅かに門柱より判斷して泉水や燈籠の土台にそれらしいものを見受けるばかりであつた。

僕は重いリュックを背負い直して今来た驛の方へ戻つてゆこうとした空には鶯が三羽靜かに舞つてゐた。

一般庶民には顧みられなかつた。時と共に戯作者の目にとまり昭和五年頃になつて、小松屋百穂(號

不知足山人)が「風流六女」と題し大體の骨子を拾ひ上げて、カナ書き繪入り本、半紙本六冊に仕立て江戸に於て發賣したため漸く世人に「肉蒲團」の名が親まれ出した。

越えて天保初半に至り志道軒老人のもとに假名書き繪入り半紙本十冊に仕立てられ題名も「金勢夢傳」と改稱され、京阪地方より内證板行發賣された。

次いで明治三十八年三月、陶山尚善訓點の書が、中型和本仕立、四冊ものとして活字鉛版として秘密出版されて大いに普及され、好事家に珍重された。

越えて、大正五年九月「新譯長生殿」と改稱されて四六版洋装、ザラ紙印刷で前記肉蒲團の直譯本が、神田隆吉名義で秘密出版されているが直譯本で砂を喰ふような迷譯である。次に昭和四年十月、花房四郎によつて、完全なる現代語譯として「NIKKEIDEN」を命名し四六版背皮洋装、最上印刷紙使用、四百部限定版として秘密出版された。

當時の好事家間には名譯であると共に製本装幀も最上と折紙のつづられたものである。上記邦譯書の五部と共に、それぞれ時代の反映特徴があつて、翻譯経路も種々巧となり興味あるものである。

◎會員募集◎

軟派文藝に興味を持たれる方で、「奇譚クラブ」直接購読半年分以上の申込者を以て、奇譚クラブ會を組織いたしております。

會員には月々「奇譚クラブ」を御送付すると共に、會員相互の連絡のため、通信案内書等をお届けいたします。

どし／＼と御希望なり御連絡なりをお寄せ下さい。

主旨に御賛同の方は、是非發行所宛に御申込下さる様お願い申し上げます。

直送申し上げる分には、別に挟み込みの連絡紙を入れる豫定をしております。會費は左記の通りであります。

會費

半年 百十五圓 (送共)

一年 二百二十圓 (送共)

○案内書のみ御入用の方は別に郵券三圓御送付下さい。

○刊號御必要の向へは、送共二十圓にてお送り申し上げます。

○申込所 堺市菅原通四丁三〇

曙書房内

奇譚クラブ宛

□原稿募集□

新進作家紹介

軟派文藝、小説、コント

特異風俗、變態犯罪實話

探偵小説、獵奇妖怪讀物

一、四百字詰原稿用紙三十枚以内

一、締切日は別に定めず、翌月號に掲載

一、採用篇には相當稿料を呈す

一、手先の技巧よりも素材本位の雄作品を期待す

一、郵券同封の分には原稿返却に應ず

一、送付先

堺市菅原通四丁三〇

曙書房内

奇譚クラブ

編輯部宛

本誌へ廣告御希望の際は、廣告部へ御申込下されば詳細御返事申し上げます。

編集おぼへ書き

創刊號はお蔭で好評を得て、地元を初め遠く地方の讀者より激勵の手紙を多數戴きました。御約束した通り第二號は表紙内容共充實増頁いたしました。更に號を追うて、一段の飛躍をすべく待期しております。

本紙は讀者と共にあり、讀者と共に編集してゆく方針でありますので、どし／＼投稿御意見等御申述べ下さい。脱線しない程度に於て、御期待に副いたいと存じます。

四圍の状況は困難を極めておりますが、萬難を排して悪條件のうちかつてゆく勇氣を持つておりますので御援助下さる様お願い申し上げます

次號には讀物珍談満載の上、讀みごたえのある誌としたいと願っております。どうか御期待下さい。

應募原稿が續々投稿されますので感謝しております。一々御返事を差し上げておりますが、優秀稿は引續いて紙上に掲載いたします。今後もどうか奮つて傑作を寄せられんことをお願いいたします。

奇譚クラブ 月刊

定價 十八圓

送料 二圓

昭和二十二年十二月十日印刷
昭和二十二年十二月十五日發行

編輯兼 堺市菅原通四丁三〇

發行人 吉田 久 藏

印刷所 堺市北區陽町二丁六四
双輪印刷株式會社

發行所 曙書房
堺市菅原通四丁三〇

大賣捌所 立 誠 社
大阪市北區神明町一三

御注文

奇譚クラブは書店買以外に直接御注文にも應じます

御送金は小爲替又は切手代用(二割増)にて發行所へお願いいたします。

地方讀者又は月々確實に入手しようとする方は、前金にて豫約下さい。會員としてゐる／＼御便宜をおかけいたします。

六ヶ月分 百十五圓 (送共)
一ヶ年分 二百二十圓 (送共)
増大號は差額申し受けます。